
スケベ勇者の桃色珍道中～目指せ、ハーレムの旅～

黒神王輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スケベ勇者の桃色珍道中～目指せ、ハーレムの旅～

【Zコード】

N7655Y

【作者名】

黒神王輝

【あらすじ】

勇者というものを、御存知だろうか。

礼儀正しく、打倒魔王とかそんなものに燃えて、国の奴隸として安っぽい金と装備で街を放り出される可哀想なヤツである。

そんな勇者の称号を嫌々ながらに習得したキルシユは、その王道展開を悉くぶつ潰していくのだった。

変態シモネタ上等！ 御都合満載、メタさ満載、イケメン美少女変態満載のくたばれ正統勇者ファンタジー。勿論、シリアルなんてぶつ潰します。

序章 ハーレム&逆ハーレム（前書き）

ライト&メタの新境地を開く為の実験台です。

旅立ちには、理由が付き物だ。

本当の理由に、建前で蓋をして、尤もらしい事をでっち上げる事、勇者に関しては、八方美人的な意識が必要になるという。世界の平和を守りますー、とか。魔王を退治しに行っちゃうよー、とか。聞けば、大半は魔王に金を貢いで影を潜めてもらつていてとか。夢も希望も勇気も無い話だ。けど、現実である。

しかし、残念ながら勇者はなろうと思つてなれるものではなく、血統である事が多い。その所為で、国王や村人達に良い顔をしなければならないと言う強制が目立つてているのだ。示しがつかないとか、いいじやんどうでも。俺の生活を動かす為には、全く関係ないし。

「勇者よ……勇者キルシユよ」

「あー……？」

呼ばれて、適当に返事をしつつ向き直ると、むさり苦しい髭面が目に映る。

こんな何の変哲も無い、無駄に髭だけが立派なステレオタイプの国王なんて、もう時代遅れだろ？ 新進気鋭の爽やかな王でも嫌だが……うん、女王様がいいよ。皆大好きだろ？

じつちの態度に咳払いをして、王は無駄に低い声で言葉を発する。普段の間抜けな声音とは、えらい違いだ。

「キルシユ。お主は剣が得意ではなかつたな。熱心に我が国 ハメラキスカ王国の象徴である風の魔術を学び、そしてどんな人物とも いや、傭兵と親しくしていいたな。そこで、得るものがあつただろう？」

「当然つ！ 究極のスカートめぐりに挑戦すべく魔術を学び、傭兵からは女の落とし方、ムフフなテクから楽しい楽しい小話にピッキング技術！ 軽い身のこなし方も教わつたぜ！ 後、足音や気配を消す方法とかな！ これで風呂とか覗き放題……悲願成就も近いぜ

つ！」

ガツツポーズを力ツコよく決めるこひらを、何故か苦々しい表情で王は眺めていた。

「……勇者というよりも、なんだか盗賊になつとらんか？ それも、かなり雑魚臭がしておりそくな……」

「あ、パラメーター見る？」

「え！？ 見れるの！？」

名前：キルシユ

LV : 1

職業：勇者（笑）

ステータス

体 : 16

力 : 6

速 : 10

技 : 10

守 : 3

魔 : 14

運 : 255

特殊技能

スカートめぐり一級、魔術・風、魔術・水、魔術・炎、傭兵の心得、盗賊の心得

「どうよー！」

「どうよ……ではないわア！」

流石に頭にきたらしく、王は顔を真つ赤にして怒鳴りたててくる。五月蠅い。

「そもそも何故パラメーターが出せる！ そして勇者に（笑）がついてあるぞ！ それにスカートめぐり一級だけ明らかに浮いてある！ 後、運がカNSTじやああああ つ！！ もつと別の能力があるじやろおおおおお つ！！

「じゃあ、勇者らしいパラメーターって何だよ つ！！

「え……体力が高く、力もあり、守備もある」「んで、足が臭い。超水虫」

「何故じやつ！？」

「あーあー、うつせえうつせえ。んで、俺に何の用？ アンタ、俺嫌いじやん。娘とかに近づけさせてくんないし」

「あつたりまえじや！ スカーレットなら五億万歩譲つて紹介してやらん事も無いが、お前は不真面目すぎるー。あやつも大概だったがな！」

勇者一族に生まれ、その次男として育つた自分。

兄であるスカーレットが勇者の任につくはずだったのだが、勇者として魔物の集落を討伐しに行き、そのまま帰つてこなかつた。だから、次男である俺が寄越された始末。

無論、そんなのはお断りだ。女の子とイチャイチャしてたい俺にとつて、勇者の使命なんざ邪魔でしかない。

夢はでつかく、ハーレム王。あ、俺……今、真理に気付いたかもしない。

「英雄色を好みつて言つだろ？」「

「そうじやな」「

「俺、超英雄じやね！？」

「お主はただの色狂いじや……。ウチの使用人達のスカートが、何回スカートめくりの犠牲になつたか、考えたくも無い」

「でも、アンタそれ見て鼻血吹いてただろ」

「ば、馬鹿モソ！ あれは、どろり濃厚トマトジュースが鼻から逆流しただけで……！」

「いつも王様はトマトを残すんです、つてメイドの一人が微苦笑してたけど？」

「と、ともかくじや！」「

仕切りなおすように咳払いし、指を差していく。

「ちつとは勇者らしい事をしてこい！ 頼むからー。」

「何でだよ！ 俺、別に好きで勇者になつたわけじやないしさあー

!

「勇者の権力使いまくつておるじやろ、お前！」
「ギルシユ、イツテギマース!!

こんな理由があつてもいいじゃない、人間だもの。

「あー、ついてねえ……。勇者っぽい事つて何だよ」

くわくわしつつ街中を歩いていると、良く手を振られる。女性も

「おひ、口喰者！ どうどう追いつかれたか？」

「ハハセーよ。何か、勇者っぽい」としゃってや」

「いや、それより、これ食べてみてよ！」美咲が出来た

「アンタなあ、彼氏へのお菓子の毒見役を俺にやらすなよ！」

「え？ これ、お父さんにださど……」

んじゃ
ね?
—

「ありがとう…参考にしてみる…」

「金の三幸社」=「あやんの社」=「

卷之三

「勇者殿……今日も凄まじい性欲ですね」

いや、だから手ねたさねえっての！ 何を聞いてたんだ！ ？」

と懶りのだが、心のどちらへ。

親しくしておきたいのは原者の名前だけで、本邦は……。

な一軒で暮れて居たが、明がないので、過当に寒いので、こゝに、控て、風船が舞ふ土がつて、一あ。帆艘は、少しある土壁が、今も

天に召されようとしていた。

「ふーせんがあ……」

「仕方ないでしょ？ 手を離すのが悪いんだから……」

「でも……うつ……うつ……」

「ああもう、泣かないの！」

そんな親子のやり取りを見兼ねて、俺は建物の陰に隠れ、点になりつつある風船へと手をかざした。

空気中の魔素と呼ばれる物質を、自身の精神を触媒に魔力へと変換し、正面に飛ばす。これが、魔術の基礎。

普通は力いっぱいぶつける事しか念頭に無い。魔術は、対魔物や山賊の切り札で、威力が問題でもあるのだ。

しかし、そう言つ連中は決まって馬鹿だ。数をこなして強くなろうとしているから。

必要なのは、効率よく魔素を集める集中力と、大量変換に必要な精神力。そして、受け皿となる己の体力だ。無論、俺はこの二つを幼少より鍛えている。

更にコントロールの修練を積めば、スカートめぐりは当然、こんな事も出来るようになる。

「紡ぎ、そよげ……」

詠唱は魔素を魔力変換し、展開した魔方陣に飛ばす役目を担う。魔方陣に届きさえすれば、何でもいいのだ。下級なら、言葉数も少なく済む。まあ、魔力によりけりだが。

「手繕り寄せる風の腕」

魔術名を叫ぶのは、イメージを固める為に必要な行為。これもまた、発生させた魔方陣に届かせる事で、発動の引き金となる。ちなみに、イメージさえ出来れば、言葉は何でもいい。事実、今のもイメージに合わせて適当に言つただけだ。

言い忘れたが、変換できる属性は本人の素質に由る。俺は風と水、そして炎が使える。

で、俺が思い描いたのは、風の腕。イメージどおりに顕現した風が、遠く離れた風船を優しく抱き寄せ、こちらまで持つてくる。

泣いていた少女の前に風船を持つていってやり、彼女が持つたと同時に魔術を解く。勿論、気付かれないよう。

「ママ！ ママ！」

「……えつー？ それ、どうしたの？」

「風が吹いてね、ひっそり来てくれたの！ で、持つまでもっててくれたんだよ！」

「……そう。じゃ、感謝しなきゃね

「誰に？」

「頭がくすんだピンク色の、お兄ちゃんに。ね？」

そんなやり取りを背に聞きながら、キルシユは歩いていく。行く場所は、自分の家だ。

裏路地にある酒場。昼間は酒の営業はしていないのだが、軽食や昼食なんかを食べさせてくれる。

スwingドアを押して入ると、昨日のが残っているのだろう微かな酒臭さと煙草の臭い。それらを埋め尽くすように、料理のよい香りが漂っていた。

店主である男がこちらを見、何かを投げ寄越してくれる。油紙に包

まれたそれは、暖かいホットドッグだ。

「ちゃんと食べよ？ お前、男のくせして食が細えからな

「サンキュー」

包みを開けつつ、空いていたカウンター席に腰掛ける。

店内は木造で、そこそこ広い。夜は大柄な客や冒険者などで賑わうが、昼は学者やらも軽食を摂りに来ている。そこそこ繁盛しているのだ。

「どうしたよ。いつも日課もその調子じゃ成績なしか？」

「いや、まだやつてねえ

マスターたっぷりのそれを齧る。分厚いボイルワインナーと新鮮な葉野菜の食感が見事で、相変わらずピリリと舌を刺激するマスター・ソースが最高だ。ホットドッグは、この店が俺にとっての一番だと思う。

そんなこじらりを、毎に星でも見たかのような田で見る店主のワーグナー。

「お前……熱もあるのか!? あの『桃色の脳細胞』とか『煩惱の塊』とか言われてたお前が!?!?」

「……誰が言つてた? 裸に剥いて教会の十字架に一日中逆さにひるして曝してやる!」

「スカートめぐりが特技で、一ヶ月の下着の色を統計しているヤツがそんな事いうのか……」

高尚な日課とは、風の魔術でスカートをめぐり、瞬時に見定めたパンツの色を統計して、この街の性欲推移を図るものである。

この街は純白が六十とかなり素晴らしい結果を残している。個人的には黒もありだが、たまに見かける紅いのはどうかと思つ。まあ、好き好きだとは思うが。

「それよりも聞いたか? お前みたいなヤツが居るんだと、しかも悪質な」

「ああン? 聞き捨てならねえなそりや!」この街の女性を傷つけるヤツア、この俺が!?

「同じ事を言わせる気か、アホ。……女性だよ。その犯人。ターゲットは、若い男だ」

「はあ……?」

何が楽しいんだよ、それ。

と、カウンターで食事をしていた青年が、ものすごい形相でその話題に食いついてくる。て言うか、それ餡子入りパスタライスじゃん、ゲテモノメニコーの。舌大丈夫か?

「オレが……オレが被害にあつたんだ! 初めて出来た彼女とデートしてる時にさ、その女が通り過ぎて、下半身が一瞬で露出しちまつたんだ!」

誰が得するんだ、そんなの。

良く見れば、顔立ちの整つた青年だ。パツと見、神経質そうで、故にモテなかつたのだろう。不憫な話だ。まあ、とりあえず口の周

りの餡子拭けよ。

「彼女からは『……あつた』って言われて、その通り過ぎてつた女の子は『残念、好きじゃないですねえ』って言われて……。で、彼女に……フランだ……」

「「う、うわあ……」」

ワーグナーと一人で、顔を引き攣らせる。そんな、えげつない。男の自信を根こそぎ奪う鎌のよつた言葉を吐く女……なんて恐ろしい。そして餡子拭け。

「オレが多額の金を払つて情報屋に問い合わせてみても正体不明。ただ、異国の剣やら色んな武器を扱うそうだ」

そう言い終えると、男は袋をカウンターに叩きつけるように置く。中で弾けた音からして、金貨だ。それも、相当枚数の。いやだから拭けよ、餡子。

「頼む、勇者！ ヤツを……ヤツを殺してくれ！」

「ヤダね」

鼻で一蹴し、餡子に塗れて情けない男の面を笑つてみせる。

「殺してなんになる？ お前はその女に見下されたまま、生活しなきやなんねえ。何故、そんなことが出来るんだ？ そんなの俺はごめんだね。根性無しの尻拭いもな」

「あ……」

悔しそうに歯噛みする青年から顔を逸らしつつ、視線だけ向けて、神妙に聞いた。大切な事だ。

「そいつ、可愛いか？」

「あ、え……？ えつと、幼さが残るセクシー系つて言つてた様な……」

「じゃあ俺の女にする！ 決まりだ、ハーレム計画の一端を担う存在になつてもらわにやな！」

「な、なら……これを軍資金に」

男が次に紡いだとした言葉を、食べかけのホットドッグを口に捻じ込んで黙らせる。餡子と最悪なハーモニーを奏でること、請け合

いだ。

「 その金で次に出来る彼女にプレゼントでも買つてやれ。俺が女口説きに行くのに、何で金が要るんだよ」

席を立ち、店の奥にある私室に入る。

木造の小さな部屋だ。ベッドと机があり、替えの服がたたんで数セット置いてあるだけの、簡素な部屋。

白い気品のあるズボンと、黒い襟付きのシャツはそのまま。若草色のローブに、激しい動きにも耐え得る革のブーツに履き替える。短刀や小道具を収納したポーチをベルトに括りつけ、準備は万端。店内に戻ると、青年と同じくらいの年齢の男達が、じわじわを見ていた。

「 お願ひします！」

「 だーかーらー、俺は女口説きに行くだけだつてのー。ほら、散れ！」

手をパタパタさせて男達を解散をせつし、俺は駆け出し、
「 紡ぎ、纏え……誘い吹く風の跳ね靴」

魔術を発動させて、文字通り跳んだ。すると、風が身を運んでいく。高い建物へと、誘われるよつ。

上から見下ろす街並みは、とても綺麗だと思つ。

ちゃんと整理されて作つてある石畳の通路に木造や古い石垣で出来た建物。同じく、整理して張り巡らされている用水路。

行きかう人々にはほとんど貧富の差はなく、スラムもない。賑々しい市場を筆頭に、カッコいい、可愛い、逞しい、知的な少年青年が盛りだくさん。

「 いいなあ」

涎が出そう。

「 おつと。いけないいけない。この街ではあんまり騒ぎにならない

よつにしないと……」

前の街みたいに、不細工でもさい男の人たちから追い回されるのは勘弁だ。

「でも、もう騒ぎになつてんぜ？ 若い男の下半身を通りすがりに露出させる最悪な女の噂」

背後から届く、青年の声。いい声だと思ひ。軽い感じがしているが、それとは裏腹に怜悧さも幾分がある。こちらの対応を決めかね、そしてどういった風にでも対処できると言つた自信と警戒の現われでもあるのだろう。

とりあえず出方を伺つべく、会話を続けてみる。

「そう？ でも、この街にはスカートめぐりを生きがいとしている人もいるみたいだし……」

「ありや趣味だつつの。下着の色の統計をつけるのが、習慣ただけだ。習慣をビリビリと口出しされる謂れはないね」

「凄い理屈」

言いつつ、振り返つてみた。相手の顔を見ないことは、始まらない。

「え！？」

「おつ！？」

好みをストレートで打ち抜いた男性が、そこにいた。

紫だかピンクだか分からない、中途半端な色の髪を長くし、不思議な模様をした黒のバンダナで適当に髪を止めている。

瞳も同じような色をしていて、黙つていればクールな一枚目という顔立ち。バランスの取れたスタイルも、足の長さも、纏っている服の質も、嫌味にならない程度に上等で、男女共に好かれそうだ。そんな彼は、こちらを見て驚いたような顔をしている。何なのだろうか。

正直に言つと、メッチャ好みだった。

色素の薄い、金とライトブラウンの中間をいく癖のある髪を長くなびかせ、あどけなさを残す可愛らしいが美しい顔をこちらに向ける。

少しだけだが見開いている瞳の色は、蒼。物に動じないのか、知つていたのか、背後から話しかけたのに会話を交わせる余裕もある。性格も、そんなにキツそうではないか。どちらかと言うと、天然系に見える。

が、あまり表情には出ないようだ。苦労をしたか、人を多く殺してきたか、精神に障害があるのか。感情が表に出ない人物は、大抵そんなものだ。

ともあれ、自分より頭一つ低いくらいの身長も、バランスの良いプロポーションも、小洒落た青いドレスも素晴らしい。特にドレスは肩紐が細く、体のラインが強調される上にスリットまで入った大人のイメージで、どこかあどけない彼女と背反しているようで、そこが実にツボである。

「あの、ちょっとズボンを下ろしてくれない？」

「いきなりアグレッシブな発言頂きましたー！ て言うか、それがおかしいだろ！ 何でだよ！」

「え……私のショーツも見せなきゃダメ？」

「ケツ、自発的に見せられても意味ねえよ」

「え？ あなた、スカートめぐりの人でしょ？ パンツが見たいんじゃないの？」

「馬ツ鹿野郎！ 全然違えよ！」

そう言う事ではないのだ。同好かと思つたら、ロマンを全然分かつていないらしい。

拳を握り締め、瞳に炎を宿しつつ、力説する。

「恥ずかしながらもじっくりとたくし上げられるのがいいんだ！」

それか、自分でスカートをめくるとかな！ 恥ずかしがるつてのが大事なんだよ！ それに、俺自身が見ること見せることに関わつていいパンツに興味ねえ！ それに、パンモロよりパンチラの方が

何か工口いし……

有能である諸君らは、勿論賛同してくれるよな！ 例え理解されなくとも、この胸にくすぐつて何かが反応しているはずだ！

「……へンなの」

首を傾げる少女に向けて、今度はこちらから質問せねばなるまい。「んで、何でお前は男の尊厳をズタズタに引き裂くような真似をしてるんだ？」

「……えつとね。右の太ももに、大きなほくろのある男の人を探してる」

「何で？」

「……仇だから」

彼女の表情は変わらないが、雰囲気が違う。穏やかな普段のものから、波紋も何もない水面のように静かなものへとシフトしている。静かなる殺意だろう。

「……父親の仇か？」

「ううん」

「んじや、母親？」

「違うよ」

「……恋人？」

「正確には、片思いだった。私の、ね」

恋人を、取られたのか。

「那人、幸せにするつて言つてたのに……死んじゃつた。片思いの人、自殺しちやつたの。だから、私はあの男を見つけて、ぶん殴る」

「だからつて、ズボンを切る事は……」

「顔も覚えてないし。覚えてるのは、彼との一夜を偶然見た時に目に付いた、その特徴だけ。いきなりズボンを脱いで、だなんて、聞いてくれるはずないしね」

「だからつて、切る事あないだろうに。」

と、彼女が浮かべた微笑は、幼い顔立ちにあまりにも不釣合いで。

大人のような反面、子ども染みた純粹さを覗える。こんな子が暴れたら、相当拙い。

いや、それ以前に！ 今冷静になつて考えてみたが、それちょっとおかしくね？

「……あの男？ 好きだった人は、男なんだろう？」

「うん」

「お前が追つてるのも、男？」

「そうね」

「え、ちょ……つて事は、オトコドウシデスカ……？」

「そうよ」

臆面もなく表情も変える事も無く端的に言つてくれました本当にありがとうございました御座まアツーす！

「う、うわあ……。そりや、ハつ当たりすんのも当然だわな」

「え？」

「ん？ いや、そうだろ？ 男にとられたから、その美少年にハつ当たりを……」

「ううん。最初はそのつもりで、探すのもかねてたんだけど……段々、美少年が好きになつて。逆ハーレム計画でも作ろうかなつて。今は、それぞれのナニに感想を言うのが趣味なの」

「発想が凄い方向に飛んでつてるなあオイ！ ……ん？」

逆ハーレム創造を目指している？

ならば、これは……同じ趣向じゃないか！ 実に素晴らしい！

「なあ、俺はハーレムを目指してるんだ。美少年はお前に、美少女は俺に。二人で一緒に、を目指さないか？ ハーレム計画！」
と、こちらをポカーンと口を開けて見てくる女の子。いや、そりや確かにへんな事を言つている自覚はあるが、効率がいい。何より、美少年に相手を取られなくてすむ！ これ、重要。

しばらく考えた後、彼女は柔らかく微笑んで、頷いてくれた。
「……うん、いいよ。じゃ、私からも一つ。無条件で協力する代わりに、ね」

「おう！俺は勇者だからな！」

「どこかで右の太ももにほくろのある人に出会つたら、殺すか、私に連れてくるかの二つ。いい？」

「おう！協定成立だな。俺はキルシユ。十九歳」

「私はエトワール。十七歳」

「つてなワケで、ちよいとステータスを拝見しまーす！」

「え？」

名前：エトワール

LV : 6

職業：ウェポンマスター

ステータス

体：27

力：16

技：21

速：23

守：0

魔：0

運：51

特殊技能

剣士の心得、樵の心得、射手の心得、多数戦の心得

「……凄い特技。初めて見た」

空中に浮かんだ文字と数字を見て、彼女 エトワールはかなり驚いているようだ。てか、強いなアンタ。戦わなくてよかつた。

「じゃあ、キルシユのパラメーターも見せて？」

何だか、かなり見劣りしてしまって……まあ、いいか。

「あらよつと！」

名前：キルシユ

LV : 1

職業：勇者（笑）

ステータス

体：16	力：6
技：10	速：10
守：3	魔：14
運：255	特殊技能
	スカートめぐり一級、魔術・風、魔術・水、魔術・炎、傭兵心得、盗賊心得
	「ふつ……なんで、勇者に（笑）がついてるの？」
	「うつせ！ こつちみんな！」
	「それにパラメーターが盗賊寄りだよ？」
	「ゆ、勇者がみんなマッヂョメンだつたら怖えだろ！ 僕はイケメン担当！ 文句ないだろ！」
	「うん、黙つてたらカツコいい。残念なイケメンかな」
	「おおーい！ 残念とか言うなよ！ 僕のシルクのハートがクラッシュしうしちまうよ！」
	「それに、勇者の癖に面白おかしくてスケベだし。普通、真面目でしょ？」
	「面白おかしくてスケベな勇者でもいいじゃん！ それに決めるとあは、びしつと決めるぜ！」
	カツコいーポーズを取るも、彼女はどう吹く風を眺めている。いや、じつち見ゆるよ。
	溜息を吐きつつ、真っ直ぐにエトワールを見つめる。
	視線に気付いてか、彼女も振り返つて、俺の目をじつと見つめてきた。
	「ま、何こせよ……」
	「うん……」
	じつからともなく、拳を突き出し、

「一蓮托生つてな」

今、この空に近いこの場所で、

「うん。よろしく、キルシユ」

ハーレム建設の夢への協力を、

ここに誓つたのだった。

序章 ハーレム＆逆ハーレム（後書き）

……うん、完全に勢いですね。他のもかけよと思いますが、筆が進まないのでこちらを乗せて見ました。

一章 魔の森のロリババア 前編

ハーレム同盟結託、その次の日。

王の召集を受けた俺は、その場所に来ていた。相変わらず、馬鹿みたいに高そうなカーペットだ。醤油でも垂らしてやろうか。

「……んで、何か用？」

隣にはエトワール。一人で城に行き、王と向かい合っているのだ。王はこちらを見、こめかみを押された後、静かに尋ねてきた。

「その方は誰じゃ？」

「逆ハーレムを目指すつて言つから、俺と手を組んでもらつたヤツ。あ、街で噂の若い男をひん剥いてるヤツな」

「お前のパーティーは何かがおかしいぞ！ 何でよりによつてそんなヤツを仲間にしとるんだ！」

「それは……」

「私達が……」

「熱い志で一蓮托生を結んだからー。」「

「何じやその無駄なコンビネーションー。息合いで過ぎじゃうつにー。」

キメポーズまでクロスするようにピッタリだつたのは予想外だ。意外と、波長が合つのかもしれない。

豪奢な玉座に座りなおしつつ、王は指を鳴らした。いや、鳴らさうとしてかすれた音しか出なかつた。

「クスクス……」「クスクス……」

「や、やかましい！ こそそと笑うでないわあ！ おーい、

誰か！ 例のものを！」

と、数人のメイドが何かを持つてくる。

一つは小袋。一つは剣。一つは紋章だ。

小袋の中には金貨が十数枚に銀貨がそこそこ。剣は見たところ実用と装飾の狭間をいく美しい代物。そして紋章は、見覚えのある紫水晶の首飾り。

「おい、これって……『マジックシェイプ』か?」「つむ

変換した魔力を魔方陣に通す必要もなく、思い描いた形に固める事が出来る。魔力の剣とか、そう言つ芸当が可能だ。

要するに、魔力はあるが魔術が扱えない連中が使いたがる物。本職の魔術師には、どう足搔いたって敵わないだろ?」

「俺には必要ないぜ?」

「持つて行け。お前さんの潜在属性外も使用できる。金属系と雷系が使えるぞ?」

「……これから頼む仕事に、必要になるかもしれないってか?」

「どうせ何も考えとらんじやろ? からな、しばらくはワシが仕事を世話してやる」

「はあ? そんなの? めんだね。俺は偉大にして崇高なるハーレム計画の第一歩を軽やかに踏み出したところなんだ。仕事なんて絶対に」

「……森の奥に、魔女がいるのを知つておるか?」

「その話、詳しくお願ひしまーす!」

「す、と笑いを零すエトワール。ああもへ、一々可愛いなアンタ。可愛いは正義、これがオッサンだつたらキレてたと思つ。仕方なさそうに溜息を吐いて、王はゆっくりと話し出した。

「……この街の外れに、森があるのを知つておるか?」

「おう。たまに森の泉に水浴びしにいく若い女の子達が」

「お前はそつち方面から切り離して物事をおぼえて見せんか。……

その森の奥に、魔女が住んでる。彼女の魔力を我が国に有益な方向に活用させると誓わせるか、魔力を奪うかしてほしい」

「魔力を奪う? それって……」

魔術師の魔力は、肉体がある限り際限なく沸き続けるものだ。限

界まで使用したとしても、一度寝れば大半は回復する。

要は、奪つても奪つても出てくると言つ事。それを枯渇させるには、根本から絶つしかないわけで。

「手っ取り早い話、従わなければ首を刎ねて來い。生け捕りにしても構わんぞ？」

至極簡単に言つてくれるが、相手の規模がまだ分からないので、動きようもない。

まずは外見だ。そうじやなれば、そこら辺にいた女性全員を捕らえるか殺すかしなくてはならなくなる。

手始めに、俺は質問を投げてみた。

「そいつ、いくつだよ」

「一百と少しじやと聞いておる」

B B A ジャねえか！

「はっ、馬鹿馬鹿しい！ 俺は老人介護の博愛精神なんざにみち溢れてねえんだよ！ 他のヤツがやれってんだ」

「それは残念じやな。その魔力で成長と寿命を止め、童女の外見にとどめておるそじやが……しかも処女」

「誰もやらなきや、俺がやる！ そう、勇者は期待に応えますとも

！ フウーハハハハハハハハ ッ！」

勇者らしくない高笑いは、城内に響き渡つていたという。

堅苦しい雰囲気は皆無だつたのだが、ああいつた畏まつた場所が苦手なのだろう。城の外まで出ると、エトワールは気持ち良さそうに背筋を伸ばしつつ、横目でこちらを見て話しかけてきた。

「……で、どうするの？」

「フツフツフ……。ロリババアと言つ稀有な属性から手籠めにする機会がこようとは……！」

ロリババアの定義に関しては、個人的に二つ定めている。

一つは、童女の身体にあつた年齢で、言葉遣いやら好みが婆臭い人物。

もう一つは、ロリな外見ながら、かなりの高齢をいく人物だ。個的に、こっちの方が好みではある。だって合法ロリなんだもん！

浮き足立つ俺とは裏腹に、エトワールは冷静な見解を見せてくれる。

「でも、やめた方がいいと思うわ。魔力で身体を若く出来るんなら、相当強い魔力を持つてるはずだし」

「まあ安心しどけよ。俺、対魔術戦じや無敗だしな」

「何で？」

秘策があるのは、まだ黙つておいた方がいい。魔素や空氣のうねりで精神を読めるレベルの魔術師なら、ばれる可能性が飛躍的に上がってしまうからだ。まあ、そんなレベルなら世界をとっくに滅ぼしているだろうが。

とりあえず歯を見せながら笑う。驚きの、白やー。柔らかくはないが。

「期待してな。んで、貰つた剣はどうだ？」

王から貰つた剣は、エトワールに渡した。あのパラメーター的にあつてているだろう。剣士の心得もあつたし。

が、当の本人は不満そうだ。その場で半分だけ抜いて見せてくれる。

「鏡みたいね、この刀身。斬れるのかな、これで」

ミラーフラッシュと呼ばれる鏡のような刀身になる仕上がりで、傷一つないブロードソードの腹には、イマイチと言つたげなエトワールの顔が映つていた。

「王の私物なんだから、何かしら効力があるんだろうけどな

「知らないの？」

「見覚えがないんだよ。書庫なら片つ端から読み潰したけど、そんなものはなかつたかな」

「本が好きなの？」

「いんや？ 知つてれば、傭兵のお姉さんと意気投合して話できるかなーって思つて、武器辞典五十冊丸暗記しただけだ」

「その口に関する力の源が知りたいわね」

「そりやあ当然、俺の息子からさ」

「え、息子がいるの？」

「ああ、股間の方に一人な」

「それは素敵ね。是非、ここで見せて欲しいわ」

「フツ……脱いでいいのは、脱がされる覚悟のあるヤツだけだ」

先を歩いていたエトワールが立ち止まり、俺も足を止める。

伝わるのは張り詰めた空気。互いの意見が対立し、互いがどうし

てもその意見を通したい時

「じゃ、脱がしちゃおうか」

「その前にパンツを奪われないよう気を付けるほうが先だぜ？」

「あ、私今日は履いてない」

「えつ！？ マジでつ！？」

そう、人間は武力解決を念頭に置く。

目にも留まらぬ速さで踏み込んできたエトワール。先程の剣を抜き放ち、軽々と一閃を放つ。

城から外れて、人一人いない街道に出ている。周りの建物の為か、窮屈な動きだ。それなら、こちらに歩があるかもしれない。絶対にあのスカートを持ち上げてやる！

バックステップで避け、高さを意識して跳んだ。

「紡ぎ、駆ける……天駆ける羽馬の靴！」

ショートブーツに風の魔力である緑色の輝きが纏わり付き、俺を宙にどどめてくれる。更に高い場所へと走る為、空気の波に乗つたり滑空したり出来る靴を魔術で作つたのだ。

が、

「嘘おつ！？」

「あら、ホントよ？」

遙か十メートルは飛んでいるのだが、跳躍でエトワールは追いついてきたのだ。絶対、こいつ人間じゃねえ！

「こなくそ……っ！」

呪文を言つてゐる余裕はない。ただ、もう適当にぶちまけとけ！

「おりやああああああああああああああああああああ

っ！」

！」

広さを意識して、今度は水の魔術を放つ。
叫びにありつたけの魔力を掻き集めて、展開したのだ。元々、イメージなんて幾千もの魔術を放てば思い浮かんでくるもの。詠唱は必要ない。とは言え、最近はそれを知らず、詠唱をしている馬鹿な輩もいるようだが。

魔方陣から流れ出たのは、威力はない水のヴェール。が、重さはかなりのもの。

「くつ……！」

空中にいたエトワールを水は叩き落し、そして……

「おっほお！ これは……！」

水に濡れ、よりピツタリとしたドレスが、エトワールの殺人的なボディーラインを強調させていた。やはり胸元はかなりふくよかでいて、なのに腰は細く、全体的にすらっとしたシルエットが堪りません！ いやー、『J駆走様です！

が、刹那にその姿は消え、気付けば眼前に穏やかな微笑をたたえた彼女の姿が。

「そこいつ……！」

俺の股間へ伸ばされる彼女のしなやかな手。思わず、悲鳴を上げてしまう。

「いやんつ馬鹿！ どこ触つてんのよエッチー だ、誰にも見せた事ないんだからね！ 勘違いしないでよ！」

と、触る直前で、どちらも動きがピタリと止まる。
微妙な空気の中……恐る恐る、エトワールが尋ねてきた。

「…………え？ 今の、素なの？」

「や、ち、違う！ わつきのは俺の中の女性がちょっと田間めただけで……！」

俺の素晴らしい理由^{いいわけ}を聞かず、エトワールは生暖かい微笑を浮かべて、こちらの肩をぽんぽんと叩いてくる。

「今度、スカート貸してあげるね」

「ちやうねん……！ ホンマ、今の無しや！ そんな認識されてもうたら、もうお婿に行かれへんがな……」

「うんうん、大丈夫。大丈夫だよ？」

「やめてー！ その生暖かい目をヤメテえええええつ……」
実際に間抜けな叫びが、悲しく街道に木霊した。

「何じや……。また、人が来るのか」

そう呟いて、安楽椅子に腰掛ける。

もう誰にも会いたくない。誰にも、関わりたくない。
だから……そつとしておいて。

「……消してやる」

白く細い手がゆがみ、青白い閃光を生んだ。

一瞬照らされたその顔は、白く……悲壮な顔をしていた。

「と言つわけで、やつてまいりました。ここが現場の泉です」

小声でリポートしつつ、木陰に隠れて泉ではしゃぎあう女子グループと少年のグループを、それぞれ俺とエトワールは眺めていた。
「どうよ。この位置は見つからない上に、良く見えるんだぜ？」

「もうここに家を建てたいわ。はい、これお礼のパンツ」

ありがたく、妙に暖かいそれを受け取り、ポケットの中にしまつておく。え、さりげなく何やつてんだつて？ ヘヘーん、羨ましいだろ。シルクの白だぜ？

しかし、やはりエメラキスカは女性の平均水準が高い。勿論、美人さだ。

エトワールみたいに抜群の美少女とまでいかずとも、結構可愛い子や綺麗な人は多い。水を掛け合ひ、甲高い声ではしゃいでいる娘も、そそこのレベルだ。

少年達の方は、やんちゃ盛りらしい。流石にショタコンではないらしく、エトワールはいつもの穏やかな笑みを浮かべて、鼻血を滝のように流していた。……「めん、ストライクゾーンみたいだつたよ。

「なぜかしら、この胸の高鳴り……」

「やめとけ、犯罪だから」

「でも、青い果実から美味しく育てるのは憧れじゃない？」

「……お前、天才だな！」

これからはそんなことも考えて視野を広げようと決めた 刹那だ。

突如、雷雲が群れてくる。キャッキャウフフ（？）とはしゃいでいる、一般人の下へ

魔力の気配を感じ取った俺は、エトワールが気付くよりも先に精神を集中させた。

「キルシユ！」

「おっ！ 流れ、弾け。展開するは壯麗たる蒼……清き天空の雨傘！」

雲の範囲に合わせる事で、中級規模の魔術を使わざるを得なかつた。詠唱が長いのも、中級であるが故。
そこそこしんどいが、ここで女性達を餌食にしてしまう方がよっぽど辛い！

電気は水を通すと言われているので、一見ミステイクに見える。が、それは水の中にある物質に電撃が走るだけ。水の純度を高め俗に清水と呼ばれるレベルにすると、雷を弾けるのだ。それも含め、中級でなくてはならなかつた。

そして、展開したのは水の膜。ドーム状に広がつて、それが泉全体を覆いつくした刹那、巨大な雷光が頂点へと落ちていく。

その衝撃はかなりのもので、展開していた水を集めても、あの雷には及ばないだろう。根本的に、注いだ魔力の絶対量が違う。

「くそつ……！ いうなりや……！」

古代の文献で見つけて、思わず燃やしてしまった最悪な魔術。アレを放つしかないか。

「紡ぎ、化せ。展開するは堂々たる縁。あらゆるものを風化せし、
侵食せよ…」

「風化の呪文。これは、鉄や生命さえも奪いつくす、黒い風。
「悪魔が払う漆黒の破風！」

豪つ！ と黒い風が生じ、雷撃とぶつかる。

雷は粒子の集まりらしい。魔術では、それを魔素で作れるらしいのだが、雷は才能がなかつたので『マジックショイプ』無しでの生成は不可能である。

ともあれ、俺が放つた最悪の古代魔術は粒子をも風化させ、雷を奪いつくして霧散した。

「……凄いわね。って、大丈夫？」

「ああ、心配すんな……」

呼吸が荒くなり、頭痛が酷くなる。古代魔術のよつた強力なものを速攻で編み上げるのは至難の業だ。出来たとしても、精神力は愚か、体力まで持つていかれる。

特に、水の純度を高めるとか、炎の温度を変えるとか、オプションをつけると余計にしんどい。

はあはあ、とこちらの息を見て、ヒトワールは神妙に頷いた。

「発情、してるんだよね？」

「俺は病氣か何かか!? 年がら年中発情して……るかもしけんが、魔術を使った後、性的興奮なんかするか！ それなら俺の股間は、毎時エレクトオブザフィーバーだつての！」

「でも、魔術師の次は賢者でしょ？」

「その賢者じやねえよ……ああ、つたく！ それよりも、彼女等を避難させてくれ。ちょいと俺を休憩させてくれよ……」

「うん、行ってくる

「四十秒で支度しな

その背に声を掛けつつ、木陰に寄りかかる。やはり、無茶が過ぎ

たようだ。これからは、もう少しゆっくり詠唱しよう。

と、腹の虫が鳴る。そういえば、彼女と別れてその翌日まで、何も食べていない。

「……習慣、か」

思い出すのは、魔術の修練。

空腹でイメージが出来ないケースが絶対にないよう、修行の際は常に空腹で行うのがキルシユの修行法だった。おかげで、今も昔も食が細い。

だから、空腹でも戦える。ただ……エネルギーが切れると同時に、倒れてしまうが。

「……よし

呼吸が整い、頭痛も治まった。

エトワールがいないうちに、キルシユは魔力の発生源を辿る。

先程の雷雲は、魔力の糸を介して魔方陣に魔力を伝達していた。確かに出来るが……現実的ではない。超常的な魔術の更に上を行く、神技とも呼べそうなものだろう。

使えるような人間は、人間の含有できる魔力を超えている。魔族のハーフやら、高位な魔族 例えば、ヴァンパイアロードでも、それは不可能。魔力が足らな過ぎる。ドラゴンが人化すれば可能かもしれないが、それでもレッド、ブラック、ホワイトと言った上種族でないと出来ないだろう。

『マジックシェイプ』 それを介せば可能だが、糸状に変化するものなんて、使えない。見慣れているし、糸に勢いを持たせるのは難しい。

可能性として考えられるのは一つ。

一つは、もう凄まじい魔力を持つている事。俗に言う、力技である。魔力に物を言わせて、魔方陣を遠くに展開し、糸ではなく魔素の本流として細い道を作り、魔方陣と繋げる。こうすれば、音声で魔力を届けるまでもなく、発動可能だ。ただ、眩暈がするほどの魔力が要る。

もう一つは、『マジックシェイプ』に似た道具で、魔術に指向性を持たせる『魔術指揮棒』^{マジックタクト} 要は杖だ。

魔術師が使う杖は、魔力を伝達しやすい白金などで出来た物で、物によつては魔力を秘めた宝石 魔石を先端に頂くものがある。杖の先から放射するイメージなら、ブレもなく、また無駄な魔力も必要なく、そして魔石の補助により、容易になるのだ。まあ、こちらも正規に購入するとなると、国の許可証やら貴族の屋敷が三つ買えるような金額やら……違う意味で眩量のしそうな条件が山積み。そんなヤツが相手なら、エトワールは向かない。

魔力を所有していない人物に対し、魔力はダイレクトに影響を及ぼす。

十の魔力で、例えば俺が魔術を受けたとする。俺の持つている十の魔力には敵わず、結果、ダメージなし。

だが、魔力ゼロの彼女が当たれば 十のダメージがそのまま通る。危険なのだ。

特に雷を使うなら、かすっただけでも致命傷だ。反対に、魔力を持つ相手にはそうそう効くようなものではない。魔素の粒子による攻撃だからだ。

光、雷、炎、風、水、土、金属、闇の順番に、魔力を持たないものに有効である。魔素を固め、変換するのに時間が掛かる土や金属、闇は、他の才能がない限りはあまり使用されない。

なーんて語つては見たが、結局は力技で何とかなる。雷の魔術だろうが、圧倒する魔力さえあれば、どんな相手も潰せるのだから。

「……それに、秘策もあるしな」

笑みを浮かべつつ、目的の場所まで歩くキルシュ。

その後を追う、騎士達の影に気付く事無く。

一章 魔の森のロリババア 前編（後書き）

御感想、ありがとうございます。

突つ込みどころも満載な勇者ですが、優しいこの男をどうか見守つてやってください。

一章 魔の森のロリババア 後編（前書き）

注意。本小説で行われている行為は、絶対に真似しないで下さい。
犯罪です。

誰にも踏み込んで欲しくない領域を、誰もが持っている。それは物理的な空間だったり、心理的な場所だったり。個人個人において違うだろう。

人は無意識のうちに、そこから人を遠ざける。よほど親しい人物でないと、踏み込んでどうにもならず、気まずくなるのだし。私はそれが人一倍に広くなつたと思う。だから、誰にも……もう居場所を奪わないで欲しい。

が、そんな願いは知らんとばかりに

「おっじやまつしまーす！」

何故か窓から侵入してきた優男は、今までの概念や私の気持ちを、スタイルッシュに粉碎していった。

窓破壊まで、五十秒前の話。

俺は眼前のドアを見つめ、顎を撫でた。

（うーん、着替えを覗くべきだろうか。いや、相手は遠隔で魔術を放てる相手だ。気配を消しているとは言え、何となく気付いているだろうな）

そんな事を考えつつ、他に入り口できる場所を遠目で探していく。正面に入り口一つ。後は、窓が四つと、なんとシンプルな建物だらう。驚きである。

（堂々と正面から突入するのは、馬鹿のやることだな。友好的に、且つ俺が馬鹿だとカテゴライズされないようにするには……！）

大きめの窓を見て、俺は助走をつけつつ、音もなく跳んだ。

「スタイルッシュ おっじやまつしまーす！」

言いつつ、窓から進入する。え、その結論はおかしい？ うるせ

え！ ロリババアを前にして俺の興奮は最高潮なんだよ！ 少しく

らい適 当でもいいじゃん！

窓を粉碎し、木の床に降り立つことに成功。流石は

な、何じゃお前……！」

深いのある高い声が 戸惑いを隠しきれずに揺れでいる
彼女の方へと振り返りつつ、東洋のカブキ……だったか？ そん
なポーズを真似つつ、見得を切つてみた。

「俺様、スタイルッシュに参上！」

「いや、動くでない！ 破片が散らばるだろー。」

「あ、サー、セン……」

頭を下げる、丁寧にガラスを片付けていく童女を見
目を見張

7

魔術師限定だが、髪の色で大体才能は判別がつく。

て、くすんだピンクのような色合いになっています。

彼女は、薄緑掛かつた白髪だった。光と雷を有しているらしいが、

「綺麗だな、その髪！」

「な、なんじやー? わ、お前、わが、や、やめんか! く

「…………！」

気持ちがいい。この艶と弾力、それに加えていい匂いがする！ 最

「この……っ！ 近付くなあああああ

突如、叫びで発動させた電流に身を拘束される。

憤然と無い胸をそらして、少女はじちらを憮然と青い瞳で睥睨す

100 口語化

「ファン。」そのまま焼かれるがよい。二三の電流、よもや耐え切れまい

?

- 10 -

「先輩、なんじや？ 辞世の句でもあたらね、聞こいやいんだも

「……………ギーンモチいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい

卷之二

「な、ちょ……ええええええつ!?」

そう、秘策とは。

相手が女性 美女 美少女であるならば、妄想によって痛みを
快樂に変換できる。セルフ・M・スイッチである。

「はあっ、はあっ……！」ロリ美少女に電流なん

「お、お、寄るでなー!! 気色悪ーぞ、お前え!!

電流がつよくなるけど、これはシンディーで言つシンなんだよね！

ビリーテレと
？

「フヒヒ……！ 何で逃げるんだい？ 分かってるよ、これは君の愛なんだろ？」

高速の魔弾。多分、光の弾だろう。一瞬で、しかも動搖した状態から放たれたのにも拘らず、必殺の威力を誇つてゐると見た。

「おまえ、おまえの娘が、」
彼女が叫ぶのとほぼ同時に完成した魔術を放つ。

水を通った光は屈折し、俺から僅かに外れ、奥の窓を吹っ飛ばして消えた。危ない危ない！

が、彼女は本気の殺意を以つて、一いちを睨みつけてくる。まるで、拗ねた幼子のように。

「先程の魔術を防いだのは、お前か」

「凄いっしょ！？ これが俺の勇者たる由縁だぜ！」

「……警告する。どこかへ行つて、もう関わらないでくれ」

「無視かい。泣いちゃうぞ、寂しいし。

「何でそんな事言つんだ？ つれないぜ。こーんな暗い森にいるから、考え捻じ曲がつちまうんだよ」

「そうか。なら、そんな女と関わるな。頼むから……一人にしてくれ」

重い、雰囲気だ。

何が彼女をそうさせているのかは分からぬが、何か根深いものを感じる。人生経験で言えば、トラウマに近い部類の拒絶に似ていた。

「私は……五百歳になる」

「え？ 見えねえよ」

「当然だ。……私の中の魔力が強すぎて制御できず、成長が止まっているのだからな」

自嘲的な笑みを浮かべ、彼女はゆっくりと椅子に腰掛けた。

「私は貧しい家庭に生まれて、ぬくぬくと育つた。この年齢まで、魔術の才がなかつただの少女だった。ある日の事だつたよ。突然村を襲つた凄まじい闇の魔力にあてられ、私の中に眠つていた魔力が起きてしまつたんだ」

魔力を持つものは、先天的か後天的かに分かれること。

魔術師の家に生まれれば大抵は魔力をもち、極まれに一般家庭からも誕生する事がある。

が、後天的は、魔力の才を持ち、何らかの形で魔力が呼び覚まされたりする突発型だ。専門知識も何も持たない状態で放り出され、暴走した例も少なくない。

ましてや、闇の魔力だ。何らかの影響を、人体に「与えたに違ひない。

「……私はな、人の身であると同時に、その闇の魔力に中てられ、

化け物の姿として認識される事になつたのだよ

「俺には普通に見えるけど?」

「そうだな。魔力を持っているからだろ?。……それ以外は、思わず石から剣、大砲まで持ち出されるほどの、醜悪な化け物に見えるんだそうだ。呪い、だろ?」

やはり表情を変えず、淡々と彼女は言葉を紡いでいく。

「最初の村は追い出され、気持ち悪がられて誰にも近付いてもらえず、だつたら破壊しようとした結果、生き残った魔術師の間で魔女と呼ばれるようになつた。……それだけだ。一般人には風に音声を乗せて警告をしているが、入ってくるとなれば迎え撃たねば大きな騒ぎになる。もう、静かでいたいんだよ……」

そう語る彼女の瞳に、ランプの輝きが反射している。美しい、涙。悲しい、涙。

ずつと一人で、誰にもその苦しさを言えず、溜め込み……諦めていく。

届く場所に手が届かなくて。当たり前の幸せさえ、彼女は映してくれない。

「目にいく魔力を抑えて、見てみるといい」

言われたとおりにし……目を瞑つてしまつ。

闇が纏わり付き、狐だか熊だか分からぬシルエットが彼女を覆つてゐる。もはや人としての原型はなく、常闇を纏つてゐるかのようだ。

彼女はそれを見て、悲しそうに目を伏せる。

「……そうだ。お前ももう行くといい。こんなおぞましい輩に付き合つても得がないだろ?。ああそうだ、勇者なのだろ?。ならば、私を討て」

ある種の清々しい表情を浮かべ、彼女は手を広げて、迎え入れる仕草をしてみせる。

「お前になら、構わん。もう疲れた、休ませてくれ……」

立ち上がり、彼女はそつと目を閉じた。これは……好機?

「それじゃ……」

すかさず近寄り

その長袖のローブを一気に翻した。

「わーおー。レースの白ー。可愛いパンティーちゃんつー。」

彼女は顔に青筋を立てつつ、何かを必死に堪えていくようなトンで質問を投げ掛けてきた。

「何を……やつとるんだ、お前は」

「何つて？俺がここに来た目的だけど？」

「……経緯を話してみる」

「(+)に合法口りがいるって言つから、パンツを拝み、出来れば頂戴しようかなあと……ぐふふ、いやらしいですな！ レースだなんて！」

「お・ま・え・はあ……ー！」

「ほふつー？」

白い綺麗な足の膝を顔面に貰い、倒れてしまつ。痛い。でも、僕、

満足！

「勇者ではないのか！？ (+)で悪を挫くのが、勇者では」

「悪つて、何だよ」

そう、腹が立つ。

「勇者が悪を挫くのは定番だわな。でもよ、悪つてなんだ？」

分からぬのだ。正義とか悪とか、そんな観念が。

「例えば貧しい少年はパンを盗んだ。逃げ果せた少年は、貧しい子ども達にそれを分け与えた。子ども達から見れば少年は正義の英雄だし、パン屋から見ればつるし上げたい悪者だ。明確な基準なんてないし、それでいいんだよ」

「だが、私は魔女で……」

「処女なのに？」

「い、言つな！ と言つたか、何故知つておるー。」

「まあまあ。呪いなんて、どこ吹く風さー。きっと、風が解決してくれるだろうよー。」

飄々と受け流す俺に、とうとう怒ったのか、可愛い顔を吊り上げ

て、彼女はまくし立ててくれる。

「お前は……！ お前はなんなんだ！ 私の過去を聞いた、醜い姿

同情でもして欲しかつたのか？

な、なんだと？

「ああつらいねー、大変だつたねーとか何とか言つて、抱き寄せてやれば満足だと? ほざけよ、婆さん。俺は俺がしたいように行動してるんだ、アホ臭えんだよ」

一つの形相で、感情の表

「俺はな、目の前にいる女の子を口説くのが目的なんだよ！　過去とか醜い姿だとか、そんなもんで混ぜつ返すなー。」

「な、なに……？」

「俺はな、めちゃくちゃにしていった。」

急に輝きかしほみ、間抜けな声を彼女は漏らす。そこでですかさず、ワインクを投げてみた。キラッヒ。

「俺のハーレムにならなか!? 世間で見 摄はさせねえよ！」

堂々と言い放つた俺を、何故たか彼女は呆けて眺めていた。

焼き付けておこい。

紛れ 扩え 展開するは堂々たる縦
悪じも思ひを風に乗せ 打

を上げて天へと誇る破邪の清風！」

少しひんせうじとした風か上昇氣流などと思ふきり襯を持ち上づ、少し鬱うなできて、いふ胸元刃つまで服をたぐし上づた。(つ)

ん、
絶景哉。

「いやー、ご馳走様です」

彼女の眩きによって、緑色の輝きが目の前で収束し、

「おつがと」の「れ」は「れ」の「れ」の「れ」

叫びによつて放たれた魔術によつて、俺の体は砲弾のよつて家をぶち抜き、泉へと飛んでいったとぞ。

命令を受けていた騎士たちは、勇者キルシュが敗走したと見るなり、小さな家屋へ突入する。

「あ……っー？」

そこにいた少女は、何かとてつもなく怯えていた。多分、あの変態勇者に何かされたのだろう、可哀想に。

「大丈夫かい？ あの変態勇者のことば、犬のフンでも踏んづけたと思つてくれればいいよ」

「フンだけにて？ お前、全然笑えねえよアホか」

「そんな意図ねえよ！？ つか、オヤジじやねえ！」

「それこそ言つてねえし。そういうやお前幾つだつけ？」

「三十五」

「オヤジじやねえか！ 何見栄張つてんだよ」

「あ、あの……」

「うん？」

「あなた、魔力は……」

変な事を聞くものだ。騎士は、魔力を持たない者がなれるのに。魔術騎士は気取った格好をしているが、俺たち騎士は実戦的な鎧装備で臨む。昔の人間でなければ、一目で分かるというのに。

「そんなものないよ。そんなことより君も、こんなところにいちゃ危ないよ？ 魔女が出るつて噂だからね。その魔女はいないみたいだけど、君……知つてる？」

「し、しらない……」

「そりが、それじやあ、気をつけてね」

すぐにこの事を報告しなければ。

だが、気になつたのは……あの少女が何故か、涙を流して、愛しそうに壊れた窓を見つめている事だった。

40

「ふーん、そんな事があつたんだー」

エトワールは話半分にその事を聞きつつ、ミートスペゲティをほおばつている。

ミートソースを指で拭つてやりながら、泉でびしょびしょになつた服を着替えた俺が溜息を吐いた。勿論、恍惚の。

「あの白い肌に脚線、幼児体型つてのがまたツボだつたんだがなあ……」

「それにしても、同志を置いていくなんて……酷いわね」

「だから、奢つてんじやんよ。ミートスペにコンソメスープ流石に俺も腹が減り、今はラーメンを食べている。何か異国の食べ物らしいが、美味しいので細かいことは気にしていない。気にしちゃいけない。

「で、その闇の力つてなんだつたの？」

「ああ……最近まで解除方法がなかつた、呪いの魔術だよ。多分、闇属性の魔術に巻き込まれた時、その惡意が闇を寄り代に関係のないヤツにまで触れたんじやないか？　闇は、金属よりも質量があるからな」

「どうやつたら解除できるの？」

「並の術者には出来ない芸当。根本から、その呪いを高純度の魔力で吹つ飛ばしてしまえばいいんだ。魔力が高い相手に対して、高純度な魔力を編んで放つてのは、ほぼ確実に無力化されつからな。だから、限界にまで極めたものをぶつけるしかなくなる。水は集めると圧殺しちまつし、だから風を選んだわけ。清水の方が簡単だけどな」

「なるほどね。だから、泉に落ちたとき、動けなかつたんだ」

「そう言つこと」

黄色い麺を啜つていると、更にエトワールは尋ねてくる。

「ねえ、結局は骨折り損じやない？」

「 それでもねえよ。俺は一人の女の子を導いた。それに……」

「 それに？」

「 ちゃんと、元も取つたからな！」

笑顔で俺が掲げたのは 純白のレースパンティー。

魔の森で悲鳴染みた少女の声が響いたらしいのだが、それはまた別の話である。

一章 村長の娘とブルードラゴン 前編（前書き）

魔術の設定と解釈が凄まじいのは、この話元が凄まじい魔術もの
だった名残です。

「……姫への親書だあ？」

数日経ち、呼び出しに応じた途端にこれだよ！ 少しあはれいつとか、そんな感じの優しさとかは見せてくれないのかねえ。思いつつも、レターセットを受け取り、しかめつ面を作る。

不自然に感じたのか、王は首を傾げていた。

「どうしたのじゃ。お前は女の子大好きじゃろ、しかも姫じやぞ？」
「あのなあ……。姫様とか一般的の奴らは憧れてるけどよ、だいたい

食つちや寝してるんだからテブでブスしかいねえんだよ」

「お前……国民の夢を粉々にぶつ潰しあつてからに……」

「つーわけで、俺はノーサンキューな。こここの姫なら可愛いくてメイドさんも言つてたし、会わせろよ～

「ダメじゃ。……ほれ」

「ん？」

一枚の絵を受け取つた。『写し絵』と呼ばれる、姿をそのままにモノクロで『写す魔法』のような箱で作るらしい。

見たのは、絵本に出てきそうなメルヒエンな姿の美少女である。髪がさらさらしてそうで、その上ロングで、ロリなにい感じのスタイルで、微笑が実に優しそうで……バシチコイ・ストライクですよ奥さん！

「これが姫様か！？ ちょ、どこの姫様だよ…」

「聖アバラスタ王国じや。兄と妹がおつて、兄のメルクリー才は類まれなる』の才能を持ち、彼女 メルキューは光と癒しの魔術を使うぞ」

「ンな事あどうでもいいんだよー。可愛いかー？ 年齢はー？ これはいつ撮影したモンだー？ 三行で答えるー」
「いりんの通り可愛くて、

十四歳で、

一月前に取られた、

凄い「写し絵じゃ」

「四行じやねえか！ どこかで見たような答え方しやがつて……！」
ともかく、羽根ペンを心のままに走らせる。不安定な場所で書類を書くのは馴れてるので、王も何も言わない。

手渡したそれを見て、王は硬直した。

「……読み上げて良いか？」

「おう」

「拝啓。当方、エメラキスカ勇者と任命されし、キルシュと名乗る者。寡黙な王に代わり、私がペンを取らせて頂く事を先に御了承頂きたい」

「いい感じだろ」

「それも驚いたが、これからが問題じゃ」

咳払いし、王は続きを読む表情で読み上げていぐ。

「不躾ながら、单刀直入に申し上げますと、エメラキスカとの友好条約を御検討願いたく思つております。願わくば、あくまで対等な条件下において、互いの健勝を支援する形を。仮に承諾した前提として続けさせて頂きますが、条約締結の会議につきましては、そちらの空いた時間で結構です。決まりましたら、早めに書をお届け願いたい所存で御座います。色よい返事を、お待ちしております。」

…

「拙いのか？」

「やれば出来るではないか！ 何故、この手紙の誠実さを普段の生活に活かさんのだ！」

「馬ッ鹿野郎！ このギヤツプがいいんだろ！」

「いや、お前の言つとる事は微塵も理解できん！ そつそつて真顔でいれば、絶対にモテるはずなのじゃがな……」

「上つ面しか見てねえヤツを口説く気はないし、俺も本性を晒さないで口説く気はねえ。互いが互いに合意した上で、俺は口説くね。それがルールだ」

「でも、やつている事はナンパじやうつ」

「まあな！」

これが俺の生き様よ！

と、王は仕込んであつた一枚目の手紙を見つけたらしく、それを見て噴出した。

「な、何じゃこれは！」

「いや、俺の率直な思い」

「私の白い思いを生まれたままのあなたへぶつけたい。そして、あなたと……合体したい！？ こんな文面があるか！ これは焼却処分するぞ！」 と言つた氣付いてよかつたわい……確実に戦争になるじゃろ、これ

「ヘイヘーイ……」

不満を垂れながらも、俺は内心でガツツポーズを取る。それは囮だ。

知らず、王は封筒にそれを入れ、控えていたメイドに渡した。計画通り……。

「んで、用つてこれだけ？」

「これからが本題じや」

「あー俺唐突に用事思い出したー。これから街中で日課をしなきやならないんだー」

「まあ聞け。ある村で魔物による被害があつてだな」

「駐屯騎士にどうにかしてもらつてくれ！ 魔物討伐とかメンドそうで汗かきそうな労働はノーサンキュー！」

「……お前を農民にしたら半日で発狂しそうじやな」

「うん。俺、虫とか超嫌いだし。何アレ意味わからんない何で生きてんの馬鹿なの死ぬのアレが好きなやつなんなの？」

「飛ぶ虫があ、嫌なんだよねえ。蜂とか、蛾とか、バッタとかマジで飛んでくるなつて言いたいぜ」

「それだけなら良いじやうに。健気に生きておるのだぞ？」

「人間つてのはそれ以外の種族を受け入れられるほど、心が広くね

えよ。同じ人間同士で争つてんだからな。犬とかを友達とか抜かしてゐるヤツも、救われねえよ。餌を『え』ているつて上からの立場で見ていの限り、どう足搔いたつて対等じゃないのにな。服を着せてあげる、何かをしてあげる、とか、自分が必要な存在なんだと自分に思い込ませてんだろ？ 無意識下でさ、保守的になつちまつてる

「……ドライじやな」

「ありのままを言つてるんだ。んで、却下だ却下。騎士にやけりせろつて。それがあいつらを必要としてる理由で」

「……ドラゴンが出たんじやよ」

出掛けつていた軽い言葉が、止まつてしまつ。

「色は？」

「……北の方から、ブルードラゴンがな」

「おおい！？ 何で悠長にしてんだ！？ 全国の騎士団呼び戻せよ

！ じの国が最悪滅ぶぞ！」

ドラゴン種族は、色で強さが別けられている。

グリーン、アッシュ、イエロー、ホワイト、ブルー、ブラック、レッドの順番だ。最弱のグリーンドラゴンでさえ、国の騎士が束になつて掛かり、ようやく倒せるくらい。幼生なら一つの部隊でも済むかも知れないレベルで、結果、ドラゴンは一人ではどう足搔いても勝てないのだ。

ブルードラゴンにおいては、その氷の吐息と氷に覆われた鱗が戦闘を困難にしている。防御力は氷さえ避ければ最弱で、ある意味ではグリーンドラゴンよりも弱いが、総合的には光線を放つホワイトドラゴンよりも強い。

「ぶつちやけ、ムリ！ て言つか、逃げたい！」

「やだやだ！ ドラゴンと戦うなんてやーだー！」

「駄々つ子かお前は！？ 国を捨てて逃げるわけにもいかんだろ！？」

「俺は逃げる！ アホ兄貴と違つて、俺は命が惜しい！」

「……その村にはな、可憐な娘がおつて、それは村長の娘なんじや

が

「ぐつ！？…………だ、だけどな、俺は…………」

「その娘がまた、純情でなあ。十六歳とは思えないプロポーションでありながらも童顔で……。その子は村と共に心中する覚悟だそうなのじや。あつと、ドラゴンから村を救えば、惚れるじやううなあ～！」

「お～お～、ドラゴンが何だつて？　この超勇者キルシユ様に任せれば、一人でもちょちょいのちょいさ！　ハーッハツハツハ！」

王も、城のメイドも、衛兵も、何故だかこちらを驚いた目で見ていた。うん、今までギャグで受けていたんだろって思つてたんだろうね。だけど俺はいつも本気だぜ！

「……頼んだワシが言つのもなんじやが、騎士団を付けるぞ？　それから、魔法書もいるじやうう！」

「本だけでいいぜ。…………別に、炎を使いたくなかっただけだしさ」

王が用意させた本の中から、紅い装丁の本を一冊手に取る。

魔法　　魔術とは違う、強力無比な代物だ。

古代魔術よりも、ある種絶対的な力を持つもの。これを魔法書なしで使う、魔法使いが昔に存在していたらしいのだが、今では考えられない事だ。

この魔法は『聖炎・メギドフレイム』が記されている。これを触媒にして詠唱し、後は魔術と変わらない。

扱うには資格が要る。魔術の素養は勿論、何か特別なものがいるらしいのだ。それは心だとか言つが、結局のところ、判明していない。

個人的な説だが、多分書物に魔法ごと封印された精霊が認めた者だけしか、行使できないのだろう。いや、多分だが。

「……なあ、追い払うだけじゃダメか？」「

「わが国に被害が及ばなければ、どうでもよい。お前の好きにしよう。村はここより北にある隠れ里だ」

「サンキュー」

ワインクを王へ投げ掛け、窓を破壊して飛び立つ。

「……何故、壊したのじゃ
あつけだよバーカ。」

話をするとい、エトワールも付いて来てくれる事になった。ドラゴンが見たいとか何とか言つていたが、軽いなオイ。

「ドラゴンだぞ、ドラゴン！ ビビレツリーの」

「だつて、所詮、硬くて大きいだけの爬虫類でしょ？ 飛ぶけどね止める！ ファンタジーの難敵をそんな風に言つのはやめり！ 台無しだろ色々と！」

「ブレスだつて半端じゃないしな。そんなドレスでいくのか？」

「今日のドレスは紅いでしょ？」

「三倍早く動けそつだし、そつで当たらなければビリビリと血つ事はないんだる？」

「そうそう。それに、こぞとなつたら守つてくれるでしょ？ ね、勇者様？」

悪戯っぽく微笑んでくるエトワールに笑みを返し、街道を歩いていく。

北の村は知つてゐる。他との交流は拒んでゐるが、唯一、エメラキスカとの交通に応じてゐる要所だ。ドラゴンが出たなら村は破棄すべきだが、そう言つわけにも行かないらしい。

かなりの傾斜を登つた先にあり、高原に加えて天然の牧草地帯である。普段は、馬などを飼つてゐる女の子達がいるのだが、流石に今は入つ子一人いなかつた。

「……許せねえな」

「やつぱり、勇者として？」

「一人の男として……牧場ガールの属性も抑えておきたいのに！

畜生、ドラゴンめ！」

「ああ、やつぱり……」

ちょっと強い風に吹かれて民族衣装を翻す可愛らしい女の子達の姿が見れないだなんて！ しかも、おおらかで元気な子が多くて、お気に入りスポットだったのに！

ああ、何か腹立ってきた。

「魔法でここいら一帯灰にしてやろうつか……」

「そもそも、魔法ってどんなに威力があるの？」

「……んじゃ、見せといてやるよ。はあーあ、ちよちよいのちよいなつと！」

適当に呪文を口ずさみ、水の結界を張る。周りの光を曲げる為、内部で起きている事象は見えない。

「斬つてみろよ」

頷き、エトワールはとんつ、と駆け出す。

何か煌いたかのような一閃の銀光が奔り、結界を真つ一つに切り裂いたようにもみえた。

しかし、結局は刃が水で阻まれ、動けなくなっている。剣を抜いたエトワールは、不思議そうに結界を眺めていた。

「凄いわ、これ。水が重くて、剣が進まない。相当の水圧ね」

「まあ、この壁を今から炎で壊す。水は炎を消すんで、属性的には最悪だが……」

魔法書を手に取り、魔力を本に集める。

すると、足元に魔法陣が出現し、紅い熒光を立ち上らせる。田に映える深紅のそれが鮮烈に輝き、その美しさにエトワールは声を失つているようだった。

極度の集中状態に到り、キルシユは半眼のまま詠唱を唱えていく。「默示録に記された、鮮烈なる紅よ。我という法を害す輩へ、裁きの炎を召したまえ。願わくば、どうか安らかに」

その輝きが払われた手のひらに収束していくのを確認して、それを握りつぶした。

「……やめた、アホらし」

水の結界も弾けて、消えてしまう。

エトワールは文句を言おうとして、思わず口を開ざしてしまった。普段、すべきな妄想で緩んでいた俺の表情が、やたら渋く歪んでいたからなのだろう。

「……お腹、痛いの？」

「そんな間抜けな表情に見えたかい！？ メッチャシリアルだつたじゃん！ 台無しだよ、今の一言で全部！」

「ごめんなさい。でも……本当に、お腹が痛そうだったから」「そんなしゅんとされると下手に怒れねえし……あーつたく、行くぜ！ さつさとドラゴンにや、出でつてもらおう！」

すかすかと俺は街道に沿つて高原を進んでいく。

追つて、エトワールは横に並び、更に質問を重ねた。

「結局、本気を出せば、魔法つてどれくらいまで威力が上がるの？」
「んー……そもそも、種類が一つあるんだよ。一つは、魔力耐久値の高い連中を殺していた魔法。魔法によっちゃ、戦士達にはまるで効果がないのもあるんだ」

「え？」

「要は精神的なものなのさ。例えば、思い込みで、何もないところで火傷をするつて話を聞いた事があるか？」

「ええ。冷たい水の入ったやかんを触つて、火傷を起こした話ね」

「その強化版だ。魔力が高いのを逆手に取つたもので、対魔術師の兵器。魔術師はイメージや魔力で術の威力やらが変わるんだ。魔法によつて強力な幻想を見せられ、それが自分の体に打ち込められるイメージがリアルなほど、自分は余計に傷つく。中には、魔力を握りつぶすイメージがあつて、それをまともに見ちまつたら……もう、魔術師でいられない。つまり、死ぬんだ。魔術師を裁く法の書つて意味で、魔法書。それを縮めて魔法つてするのが一つ

一本立てていた指を、一つ折り曲げる。

「もう一つは、対魔物用で純粹に威力を特化した代物だ。これがそれに当たるな。人間には耐えられない魔力の行使を、書物が手助けしてくれる。だから、通常では考えられないほどの威力が出せる。

武器で言つなら、大砲みたいなもんだ。魔術を超える存在として、魔砲つて言葉が出てさ。めんどくさいからつて、魔法に一括統合されたわけ。正式には、これは魔砲書と言つ事になる

「……さつぱり分からない事が分かつたわ」

「要するに、俺は今、炎の大砲を持つてゐてわけ。それこそ、あの村が一瞬で消し炭になるレベルのな」

扱う人間の魔力次第だが、俺の炎の才能を持つてすれば、城ぐらには一撃だ。それだけに、駄々長い詠唱に加え、莫大な魔力を持つていかかる。一発も撃てば、もう魔力は空になるだろう。実は、俺はそんなに魔力があるわけではない。コントロールを極め、無駄なく使つてているだけに過ぎない。

「んじゃま、行ってみつか！」

「そうね」

意氣揚々と、無理やりテンションを上げつつ、その村へと入つていくのだった。

が、そこには凄まじい光景があつた。

「頑張つて、ドラゴンを追い払いよー！」

「おおーつー！」

村人達が、精一杯の武装をして、集まつていた。
防寒具の上から軽鎧を纏う何人かがいて、槍や斧、農耕具を手に、一人の少女の下へ集まつっていた。

「おお……」

「凄いわね。ドラゴンにあの人数で立ち向かおうなんて……」

「いいおっぱいだな、素晴らしい……」

「ああ、そつちね。確かに、大きいわ」

あれが噂に聞いた村長の娘だろう。ダークブラウンのロングヘアに、可愛らしい顔、低い背に似つかわしくないプロポーションが危なげな魅力を放つてゐる。

うん、ストレートに言おう。メッシュチャタイプです。

「ねえねえその彼女ー！ ドラゴンなんかやめて、俺と愛の狩り

に行かないか？」「

「えつ！？」

全員が　いや、特に男からの殺氣が殺到する。見つめちゃいやん！

「あの……もしかして、勇者様ですか？」

「そそ。あー、そこのブ男諸君。これから俺の言う事に従つてくれ

「ああ、つ！？　勇者だが、貴様はよそ者だつて。誰が貴様などに従うか！」

「そうだ、我らには誇り高き使命が

「あそ一れ！」

その一言で、急に上昇氣流が発生し、ぽかんとしていた村長の娘さんのスカートが持ち上がる。

氣付いて必死に抑えるも、時既に遅し。普通の水色だつたな。横の端の結び目がエッチで堪りません。

呆然としていた男衆だつたが、急に色めき立ち、俺の前へと喜色満点の笑みで集まってきた。うんうん、人類皆スケベ！　スケベは全国共通概念だねえ！　そう思わないかい？　お前も！

「勇者様だ！　勇者様を御崇めしろ！」

「素晴らしい！　流石は勇者様だ！　従うしかあるまい！」

「ちょ、ええええつ！？　み、みなさん！？　ど、どうしたんですねか急に！？」

欲に忠実で実に素晴らしい方々だ。憧れだつた分、見れた物の価値も高いのだろう。

「勇者様！　お、おいらはもつと上のほうが見たいんだ……！」

「馬鹿野郎！　これを見ろ！」

再び巻き起こる上昇氣流。それを恥ずかしがりながらスカートを抑える娘さん。

「恥ずかしがりながら健気に隠そうとするのがいいんだろ！　しかも、事実ギリギリ見えてるところがグゥーッド・イナアフツ！！パンモロは違う、パンチラが見てえんだよッ！　そつだろ！？」

全員に電撃が奔つていたようだ。中には妻帯者もいるらしく、奥さんからぶん殴られていたが、それでもこちらへの尊敬の眼差しが集まつてくる。

「ゆ、勇者様……！　お、おいら間違つてたよ！」

「どうか、どうか私達にその極意をお教え下さい！」

「殊勝だな、嫌いじやないぜ。あのな、男ならベッドの上で、彼女にスカートをたくし上げさせるのが最高なんだ。こつ、潤んだ瞳で……恥ずかしさと男への好意の狭間で揺れてるつてのがな、またミソなんだよ。で……」

素晴らしい工口説法を行い、男達全員を手中に収める間、エトワールはペタリと座り込んでしまつた村長の娘さんに声を掛けていた。

「彼ね、悪い人じやないの。でも、ビックリしたでしょ？」

「え、ええ。村の人人が、あんなに他所の人を嫌つてたのに……勇者様の人徳なんですね！」

「……貴女、純朴ねえ」

田をキラキラさせて、キルシユを見る瞳。それは『そんけーのまなざし』そのものである。

「勇者様なんて、初めて見ました！」

「あれ、この村にもナンパしに行つてたんじや……？」

「……ああ！？ そう言えばあの人、前に来てました！　すつごい真面目な人なんですよ！　この村とエメラキスカとの交流があるのも、彼のおかげなんです！　彼とお爺様が仲良くならなかつたら、絶対にムリでしたもの。そつか、勇者様だつたんだ……！」

「嘘！？ 彼が真面目だつたら、世界人類皆真面目でしょ」

「ホントですよ！ あんなにチャラいのが嫌いで頑なだつたお爺様が、何故かすつごく機嫌を良くしてましたんです！　『あやつほどの理解者はそうおらん』と言つて、鼻歌まで歌つてましたんですよ！？」

「……何の理解者か、教えてもらつた？」

「いえ。お前にはまだ早い、とか言つてましたけど……」

「あー……なるほど」

前屈みになりつつある男達眺めながら、Hトワールは仕方なさ

そうに溜息を吐いた。

一章 村長の娘とブルードラゴン 後編（前書き）

シリアルスちゃん！ とかいにつつ、シリアルスになつてない。よつやく冒険が始まりそつで、まだ始まらない。

一章 村長の娘とブルードラゴン 後編

「諸君、いいか？この伝統衣装の属性を守るために、一時的に避難しておくれだ！ ブルードラゴンは俺が何とかする」

『はい！ 勇者様！』

「すぐに戻るとは思うが、もしもの時は王に俺の名前を出してくれ。然る処置はしてくれるのはずだ」

「……お、俺も、やつぱり一緒に……！」

「馬ッ鹿野郎、お前が死んだら……その後ろの子に、何で言えぱいいかわからねえし、恋する乙女を口説く事あしねえよ。……彼女に笑顔を作つてやれ」

「は……はい……はいッ！ 勇者キルシユ様！！ 絶対、戻つてきてくださいね！ 気絶している村長共々、お待ちしております！」
感極まつて涙を流す者や、悔しそうに歯噛みしつつじりじりを見送つてくる者で草原はむさくるしい相貌だ。いや、女性のまつが多いのだが、何故か微妙な視線を向けられている。何で？

「おーい、エトワール！ 行くぜー？」

「待つてキルシユ。この子も連れて行くわ」

と、そこにいたのは村長の娘 確か、メロウと言つたか。

「おいおいおい。こんな純情可憐なお嬢さんを戦場にまで引っ張つてくるな」

「あら、私だつて可憐よ？」

「そうだけどさあ……」

アンタ、俺より強いじゃん。

そんな言葉を続ける間に、メロウは頭を下してきた。

「お願いします！ 私、何でもします！ お手伝いがしたいんです！」

「……なら、さ。シチューでも作つて待つてくれよ。それと、宴の準備。出来れば、君の手で作つた料理が食べたいんだ」

「え……？」

「ありや、帰りを迎えてくれる美少女つてのが、勇者ひとつての一番の報酬だろ？ 君はその役に一等相応しいんだぜ？ それに、魔法でこっちに流れてきた弱い魔物を任せんんだし、男衆は疲れる。だから、それのサポートに回つて欲しいんだ」

「…………でも！」

「あーあー、美少女に冷たくしたくはないんだけどなあ。でも、ここで死なれるよりは…………ましか。」

「あーもうー 邪魔なんだつつの！ アンタがいて、戦闘に何のメリットがある？」

「そ、それは…………」

「精々俺のテンションが上がるだけだが、俺は無力なんでね！ アンタを守りながら戦うなんてヒロイックな事なんざ出来やしねえ！ なんせ勇者（笑）だからな！ ハツキリ言えば、アンタの好意は邪魔で、酷く鬱陶しいんだよ！」

「…………っ！？」

「無能なら無能らしく、指をくわえて待つてりやいいんだよー…………あー、アホくせえ」

「すかすかと大股で進んでいく。あんなに、ショックで歪んだ顔なんて…………しかも、俺がそうさせたなんて、見たくない。心が痛むのは、俺が弱いからだ。」

守れるほどの余裕があればよかつたのだが、そう言つわけにも行かない。ホントはエトワールにだつて付いて来て欲しくはなかつたが、剣士無しでドラゴンに向かうのは無謀。

（兄貴みたいにや、いかんな…………）

「何でも一人ではこなせない。だから、俺は勇者じやないのだ。」

エトワールはしばらくその場に残つていた。

泣いている村長の娘と、それを励ましている女性陣の話が、酷く

……頭にきたから。

「ほら、メロウ。泣かないで！ あんな変態の言ひ事なんて、気にしちゃダメよ！」

「そうよ！ それに、あんなのがドラゴンなんて倒せるわけないじゃない！ 私達も行くわよ！」

が、男性陣がそれを引き止める。

「止めとけって！ あの人人が何で僕らを止めたのか、わかんないのかよ！」

「どうせオーバーに言つてるだけでしょ！ それに、あんたらだってスケベ話に花咲かせてたじゃない！ 気持ち悪いわね！」

「じゃあ、あの人人が死んでいいのかよ！」

「当たり前よ！ 勇者つてのは、国のために死ぬモンでしょ！ だから、あんなヤツも死んで当せざ

堪えきれずに、エトワールはその女の顔面を殴つていた。軽く、五、六メートルは吹つ飛び、辛うじて気絶はしなかつたらしい。起き上がつていた。

周囲の女性が敵意の視線を向けてくるが、全員眼光で捻じ伏せる。「こんなのが避けれないので。見えもしなかつたでしょ？ 装備も貧弱、脳も貧弱、身体能力はもつと貧弱……そんな連中が三十人集まつたつて、ドラゴンは愚か、私にだつて勝てないわね

「そんなのありえないわよ！ なんなら

言つた女を蹴り上げて、空中に打ち上げた。他の連中が抱きとめるのを確認して、続ける。

「不意打ちが卑怯だとか言つつもりだろうけど、魔物が待つてくれるかしら？ 攻撃する前に攻撃しますよーなんて間抜けな事、言わないでしょ？ ドラゴンはね、そんな次元を超えてるの。不意打ちなんて当たり前よ？ そうしなきゃ勝てないもの

「……じゃあ、アンタなら勝てるの？」

「ムリね。グリーンは倒したけど、あれだって名のある傭兵と三十名の騎士アタックチームでようやくだもの

「なら、あんなヤツが」

「でも、貴女より顔も良いし、貴女よりずっと強い。不細工って、心まで醜くなるものなのね。一つ勉強になつたわ」

エトワールは、涼しい顔をして、悪口を言つていた全員を殴り倒していく。

「……なんであんなに彼が開けつぴろげか、知つてる？ 本当の自分を晒して、知つて欲しいからよ。自分の本性をさらけ出すのって、怖いわよね。受け入れてくれなかつたら？ 周りから弾かれたら？ そのリスクが目先にいつちやう。当然、人と違うから……今みたに弾かれるわ。でもね、いい事もあるのよ」

残つた人物達に、エトワールは優しく微笑んだ。

「私が本当の自分を晒しても……受け止めてくれるんだから。私つて、可愛い男の子やイケメンの下半身を見るのが好きな、変態だつてのも受け入れてくれたしね」

言つて、彼女は駆けた。

話に夢中になつてゐる際、可愛かつた女子の下着を掠め取り、男子全員の服をさりげなく刻んでおいたのは、内緒だ。うほッ、いいバナナ！

「遅いぞ！ さては……シリアルスな話してたな！ こニニシリアルスは御法度だろ！ 何してんだよ！」

「大丈夫よ、最後にさりげなく混ぜつ返したから。はい、お土産」

「お前最高だな！ マジ愛してる！ ほら、とつとと行くぜ！」

下着を手に、るんるん気分で進んでいく。

まあ気合入れないと、初見で死んじやうし。

ちなみに、ドラゴンと戦うのは初めてじゃない。何度かホワイトドラゴンの幼生を叩いた事がある。

「死ぬかもしれないわね……」

「なあに、イケメンつてのは何でか早々死なねえんだよ。組み掴ま

れて自爆されたはずなのに生きてるイケメンだつているしな

「それ何の話？」

「いや、友達同士だつたんだけど、ふとした切つ掛けで敵同士になり、最後には手を取り合つて平和を摑むつて話。ありがちだろ？」

「そういえばそうね。そこで死ぬのは大抵、捨てられたヒロインとオッサンキャラだものね」

「しかも続編が作られたら、だいたいオッサンは復活するんだよな」
ストーリー展開では非常にありがちで、また熱い展開なのだが、明らかに死んだ人物を生き返らせると醒めるんだよな。難しい匙加減だ。

歩いていると、木で出来た床が高い建物が見えてくる。それがぽつぽつあり、畑に井戸と村のレベルとしてはそこそここの場所を通り過ぎた。

奥の山道を行くが、そこからは冷たい空気が流れ込んでくる。年中温暖なエメラキス力も高所であるここは涼しいが、これは平時の寒さではない。

「……寒いな。ちょっと待つてろ」

白い息を確認して、魔術へと集中する。炎系魔術は使いたくないが、これは例外だ。

「灯し、纏え。……温む口差しの羽衣」

急に、周囲の温度が上がる。普通に活動するのに、適切な温度へと。

Hトワールは顔を綻ばせ、手を振つていた。多分、動いても持続するのかどうか確かめたのだろう。

「どうよ？」

「うん、ありがとう。暖かいわ」

「……多少離れても効果はあるが、五十メートル離れたら俺からの魔力供給が途絶えるからな」

「難しいわね。……ドラゴンが幼生だと、助かるんだけど」

「まあ、魔力の少ない固体だと期待しておこうぜ」

刹那

真横に青い氣体が猛スピードで流れていった。

咄嗟にエトワールが何かを差し出していたが、なんなのだろう。

とりあえず、周りの樹木は一瞬で樹氷に変わってしまった。

「……一発喰らつたら終わりだな。で、エトワール。お前、何出してたんだ？」

「バナナ。凍つたわね」

「釘でも打つてろお前は」

力チンコチンに凍つたバナナを満足そうに持つていてエトワールに呆れつつ、風上に向けて手を向けた。

「紡ぎ、払え。展開するは堂々たる縁

風の中級呪文を唱えつつ、気配を消す。

「この森だ。気配が消えればこちらは見えない。が、それはこちらも同じ。森林伐採はしたくないのだが、どうせ永久凍土になるのだ。今ここで、消し飛ばす。

「殺到する疾風の群！」

豪！ と魔方陣から殺到する突風。

それらはばらばらに指向性を持たされ、しかしてそれは計算されつくしてある。つまり突風に加え、真空の刃を生む効果を得ているのだ。

刃を孕んだ風が辺りの木々を薙ぎ払うと、そこには傷つき、血を流す巨大なドラゴンの姿があつた。身を伏せていたらしく、成る程、あれなら遠目でも見れないか。流石の知性である。

傷は 致命傷だ。しかも、痛みを強調するかのように、致命傷とは関係ない突傷が穿たれている。

「……お前、喋れるか？」

『…………何だ、お前は』

「キヨアアアアシヤベツタアアアアア

！！

「気持ちちは分かるがその言い方は止めろ！ 気持ち悪いわ！ ……

どうしてブルードラゴンがここにいるんだよ」

ドラゴンは知能も高い。グリーンにはムリだが、他の竜ならば可

能だろう。いや、知らんけど。

息を極力抑えているらしく、ドラゴンは巨躯を動かさず、少しだけ鼻から息を吐き出した。

『フン……娘を探している。人間に化けたのはいいが、魔力がない
為に竜に戻れない出来損ないがな。が、娘は可愛いものだよ
「そうか、分かつた。動くなよ……？」流れ、零れる。展開するは
壯麗たる蒼。天より授かる一滴、雨となりて降り注げ。……降り滴
るは癒しの涙！』

言い終えると、大きな一滴がブルードラゴンの上顎に出現し、弾けて雨のよじてその体へと雨を降らせた。

傷に触れた瞬間、急速に傷が癒えていく。ドラゴン特有の自己治癒力も相俟つてか、あつと言つ間に大きな傷は見えなくなつた。

「バー力。娘を助けようとする親を、殺すわけにやいくまい。目覚めも悪いしな。それに……人化した娘さんに興味もあるしな！」

『ほう……好色なヤツだな。いいだろう、我ら誇り高き魔族は感謝を忘れん。娘との交際を約束しよう。その代わり、自分で探し出せ

覚えていれば、一度会わせてくれ』
「よっしゃあ！ 人化ドラゴンちゃんといチャイチャイ！ しかも親

「公認なんて神的シチュエーションをゲットできるなんて！　癒しの魔術師つてよかつた～！」

最高！ 超つ最高！ もうヤバいテンションが體登りで何言つて
るか意味不明だけど最高！

なその踊りを披露していた俺を、急にエトワールが足払い転はせた。痛い。

文笛を語るにどじた糸那は 指けナハが地面は突起立、危な
つて、あああああああああああああああつ！？ セツキ貰つたパンティ
一ちゃんたちが串刺しに！？

て言うか、これ貴族御用達のノーブルナイフじゃん。誰だ、こんな実用性がなくてただ高いだけのものを使う馬鹿貴族は。

「おいおい、避けちゃうのかい？ そりゃあ困るなあ～」
遠く見上げれば、影。

紳士服に金髪の、やけにニヤついた男。ひょろ長いが、瘦せているわけではなく、その実引き締まった体つきをしていた。

「御機嫌よう、勇者キルシユ。そして見慣れないお嬢さん。僕の狩りを邪魔しないでくれるかなあ？ 折角、この親の子どもを逃がしてあげたのに」

オカマのような聲音。木の上でそう笑う男に、俺は憤りを覚えずにはいられない。

「テメエ……！ 何で男なんだよ！ そこはセクシーで危ない魅力があるお姉さんが来るシーンだろ？ が！ お呼びじゃねえんだよ！ 俺のドキドキを返せ！」

「か、彼は何を言つてるんだい……？」

「そう言う人なのよ」

「で、その子どもをどこに逃がした？」

「ああ、聖アバラスターの方にね。後で追いかけて、じっくりいたぶつて殺してやるんだ」

「あつそ。紡ぎ、裂け。駆け抜ける風の刃！」

瞬時に唱えた風の初級呪文だが、男の前で霧散する。結界か。

「どんな呪文でも、僕には届かない！ このマジックガードは、中級術すらも無効化する素晴らしい道具」

「 んじや俺が貰おうか！」

跳んで、その咳きで魔術を発動させつつ、距離を詰める。

「な、何故……！？ 勇者に盗むスキルなんて……！？」

「俺さ、盗賊の心得持ちだから」

その時間は僅か一秒。急な加速でちょっと苦しいが、見事に掲げていた緑水晶を奪つことが出来た。忘れてたかい？ 僕も最初はネタだばかり思つてたよ。

「んじやま…… そだなあ、使いどころなかつたし 使つとかないと、鈍るしな」

「え？」

詠唱中略
二倍の魔力も二ていけやあああああ

詠唱破棄。身のうちにあるありつたけの魔力を代償に、使用

可能な魔術・魔法を無詠唱・無動作で発動できる荒業である。発動したのは『聖炎・メギドフレイム』。断末魔さえ残してもらえず、彼の命はこの二十行目で散るのだった。

真っ白な輝きは男を飲み込んで、嫌な匂い一つ発さない。まさに、清い炎。公平に誰もが焼失してしまう。

- 1 -

残り火を見て吐き気が来るが、堪えておく。もう馴れておくべき

「 」
ノリモ聖人の御遺言

「ああ嫌いだ。 大ッ嫌いだ。」

「大切な事だから？」

「一回言つたんだ。じゃ、ブルーベリーコン。」（略してブルベ）

『ドラゴンが行方不明なんだが！？』

妙に的確な突込みを聞きながら、もやもやしつつ山を下る。

マハマハじやなこよ?

卷之三

「アリサンが殺れなかいた!?」

ああ そのまま北は帰って貰へ」とほしだ
村人達の驚愕を見ておひで、あつ婆へ。是

木の道の驚きはさておいて、もう痴情力、最後の魔力が何とかして

「魔物を倒すのがあなたの仕事でしょ！ しつかりしてくれない！」

?

「あー？」 信用してなかつた癖して、良く言つぜ。俺を嫌つてたの

にしむとなら、たゞ彼をへぐのか？ せめて虚勢張つてゐよ。性格

「なつ！？」

十一

「そもそも、魔物を殺すつてのはどうなんだよ。魔物からみりや、俺らが化け物だ。……頭の悪いお前らでも、分かるだろ？ 話が通じるような魔物とは協力しといた方がいいんだよ」

渋面を浮かべる村人達の間を縫つて、村長とメロウが近寄つてくる。

「安心して、よいのじゃな？」

「ああ。同志を死なせたくないしな。あの性格、バス共はともかく」「そう言つた。ある意味では、人間らしい。が、醜いのも然りじやがな」

老人の眼光が村娘を射抜き、それだけで騒ぎ立てていた連中が静かになつてしまつた。流石の威光、やるじやん爺さん。

「あ、あの……！」

「ん？」

差し出されたのは、美味しそうな匂いのするパン。そう言えども、石を積み上げた簡易の竈がある。

「シチューは道具がなかつたので……パンにしました。あの……私たちのこと、あまり良く思つてないのに……何とかしてくださいて、ありがとう御座います！」

礼を聞きつつ、差し出されたパンに銀の棒 いや、止めておこう。

そのまま齧り付く。……薬草が風味を良くして、浮ついた甘さをしつかり抑えている。美味しくて、飽きの来ない味だ。

「ん、いいつて事よ。それに、俺は全美少女及び美女達の味方だぜ？ 君みたいな子が助けを呼んでるなら、いつでも駆けつける。だつて、ほら。俺、勇者だし？」

適当な返事を返しつつ、とりあえず彼女の肩に手を置いて、そつと立ち去つていく。

「ねえ……」

「ん?」

「何で、銀の棒を?」

「ああ……習慣だよ。信頼してねえヤツから受け取った物には、当てるようにしてる。毒で変色するんだよ、銀は「完全に村人達が見えなくなつてから、草原を歩きつづもやう説明していく。」

「それに、何であの人を殺したの? 結構、容姿だけならいい感じだつたのに」

「いや、魔法の見せ場なかつたし……」

「うわあ……それだけの為に?」

「モチ、下着を台無しにして許せなかつたつてのもある。全てが重なつて一つになり、それが冴えたやり方つてヤツになるんだよ」「あの後、下着のお墓まで作つてたわね、流石に引いたけど。で、結局は無報酬なの? あの娘の胸でも揉むのかと思ってたけど」「報酬なら、貰つたよ。……あー、なんか限界くせえな。俺、しばらく寝るから。先行つてていいぞ?」

田蓋が重い上、これ以上歩けそうにない。

幸い、ブルードラゴンが去つた事で、温暖な陽気^{陽気}に恵まれている。草原に寝転がり、目を閉じた。

風は温かい草の匂いと共に、綺麗な花の香りも運んでくれる。隣に寝転んだ、エトワールだろう。

「私も、付き合つわ。いい天気だしね」

「ああ。平和つてのが……勇者の報酬さ」

そんな彼のズボンを見て、エトワールは苦笑した。

「……見えてるわよ?」

「勇者様……あんなパンだけで、よかつたのでしょうか?」

「いや、我が娘よ。ヤツは大変なものを盗んでこおつた

「え……？」

「……お前の、ブラジャーじゃ」

「え？……あっ！？」

だつて欲しかったんだもん！

僕、満足！

一章 村長の娘とブルードラゴン 後編（後書き）

G M E X P 欲しいよ……。ガンム、ガンム……。
個人的にXのディバイダー装備が好きです。ハモニカ砲が最高に力
ツコいいなあ……つて、これファンタジーものだつたよ。
ゼロ使が四期やるらしいですね。正統派はいいなあ、カッコいいし。
熱血書きたいよ熱血。

三章 傷い容姿のお姫様～ウホッ、もあるまい～ 前編（前書き）

キーワード・ル ズゴップ

聖アバラスターの王都、レイフォール。

王が崩御し、周りとの友好関係は白紙に戻っていた。

現在、どの国も静観している。国王である王家兄妹の兄 メル

クリー・オの手腕を見たいが為の行動だろう。

そんな中で届いた、一通の親書。なんと、大国であるエメラキス力からの書状だと言う。

「お兄様！ エメラキス力が友好条約を？」

「ああ、そうだ。メルキュール、これで少し肩の荷がおりそうだな」
儂い容姿をしているのだが、気が強く活発なメルキュールとは裏腹に、メルクリー・オは寡黙で鋭い印象の青年だつた。

メルキュールは歌と癒しの魔術、持ち前の明るさで人気がある。対するメルクリー・オは年に似合わない風格と気品を備え、弓の腕はピカイチ。一人ともだが、少々天然ボケではあるものの、それもまた魅力の一つだろう。

今までに、この国は彼らによつて団結しよつとしているのだ。

「で、何と書状を？」

玉座に座つて書面を切れ目でさつと田を通し、メルクリー・オは静かに頷いた。

「……ふむ、向こうの勇者殿は中々礼儀に通じているな。見てみろ」
読めば、丁寧な筆跡で字が描かれている。流れるような字体だが、雑ではなく、むしろ完成された絵画のような美しさと統一感を覚えた。

「字、綺麗ですね」

「ああ。書記に通じているとなると、かなり聰明な人物だろう。今までの筋肉ゴリラとは違つたタイプのようだな」

「き、筋肉ゴリラって……にしても、凄く丁寧ですね。若輩者である」「ひらへ、上からでもなく、あくまでお願いする立場で……」

「好感が持てるな。ふむ、惚れそうだぞ」

「惚れちゃダメです男ですよー！」

「半分冗談だ」

「半分本気じゃないですか！？」

「……む？」

一枚目の紙を見つけ、何食わぬ顔でそれを見た後、メルキュールにそれを手渡した。

「え？」

書面を覗き込むと

『メルキュール！ メルキュール！ メルキュール！ メルキュール！ メルキュ
ルうううううわあああああああああああああああああああああああああ
ん！ん！ん！

ああケンカケンカ！ ケンカケンカ！ スーハースーハ

思わず書類を投げ捨て、飛び退いてしまった。何、この怪文
章！？ほんとに同じ人が書いたのコレ！？見てられないよ！
その書類を拾いなおして、メルクリーオはやはり真顔で言ってく
る。

「最後まで見ろ。」れほどの思いが籠つた手紙を粗末にする気か？」「何か恐ろしいものしか感じないですお兄様！　思いが重いです禍々しいです！」

「一度、同じ事を言い坂はない。ほり」

意を決して、再びその文章に目を通していく。

『メルキュール！ メルキュール！ メルキュール！ メルキュー
ルううううわあああああああああああああああああああああ
ん！ ！ ！ ！

あ姫様になれて良かつたねメルキュールたん！ あああああああ
！ かわいい！ メルキュールたん！ かわいい！ あつああああ
あ！

「写し絵のメルキュールちゃんが僕を見てるぞ！ メルキュールちゃんが僕を見てるぞ！」

脳内のメルキューちゃんが僕に話しかけてるぞ！！！
た……世の中まだまだ捨てたモンじやないんだねつ！

四

あつあんああつああんあメロウ様ああ――！　董ええええ――！

ラスターのメルキュールへ届け!』

涙目はなしてゐるスリギリリへと
スリギリリ乃是首をかしけた。

「どうした？」

したのだが「

どうやら本気らしく、何度も文面を見返しては、うんうんと頷いていた。えええええええ！？ ここで天然振りを発揮ですかお兄様あああああつ！？

「『んの絶対おかしいよ！……』と叫つかこの三章田つて何ですか！？そもそも発想が病氣ですよー。たまに出てくるHトワールつて誰！？『写し絵をどこで手に入れたんですか！？』妄想が行き過ぎてますよ絶対！」

「む……？ なら、本人を呼べばいい。おい誰か！ エメラキスカのキルシユを国王権限でここに招く！ 速達で書を出せ！」

「呼ぶの！？」

終には敬語も忘れ、メルキュールはただひたすらに混乱の坩堝に嵌るのだった。

「 紡ぎ、昇れ！ 悪戯好きな桃色の風！」

街中に吹き荒れる上昇気流。

スカートが現在流行している事もあってか、行きかう人々はスカートを押さえつつ、その下着を露にしていく。

瞬時に色を数えつつ、いい感じのお尻を見ても顔を緩ませる俺。いいねいいねえ！ 最高だねえ！

「おっひょ～！ 今日は白三十一、青と白のストライプのレア柄が三枚、バックプリントが一枚、ピンクが十二枚か……赤が減ったな」そして俺の息子は、今日も元気です。

メモに記載しつつ、高い建物から飛び降り、いつもの酒場に入る。来店に振り返ったのは、むさくるしい店主 ワーグナーと、超カワ綺麗なウェポンマスター エトワール。彼女の方は、笑みを浮かべて軽く手を振つてくれた。

「よう、エトワール！ ……って、お前は飽きもせずにコンソメスープにパスタかよ。他のモン喰えよ」

「お前は食事の回数を増やせ。一日三回が目標だぞ」

「で、そう言うキルシユはなんにするの？」

「ん……野菜ステイックで」

「却下だ。鴨肉のローストサンドにジュリアンスープ。これくらい喰え」

「多いって……」

言いつつもカウンターに腰掛け、エトワールと対談する。

「ドラゴンは帰つたる？」

「ええ、そうみたいね。村長の娘さん、何でかあなたの事を更に力

ツ「よく見てるみたいよ？」

「当然！」この稀代のイケメンにして才覚溢れる術の使い手、ありとあらゆる心得を供えた勇者キルシユ様に向かって、当然過ぎる事を

を

「私、帰るわね」

「出来心やつたんや見捨てんといてーなあ、後生やさかい！ な！ ？」

「その変な詫りはなんなの？」

「いや、咄嗟に出てくるんだナゾや……何なんだろ？ な？」

「私に聞かれても困るわね」

と、無造作に鴨のローストサンドに白の陶器カツブに入ったジュリアンスープが置かれた。あ、ジュリアンスープってのは千切り野菜のスープで、薄いブイヨンと塩で味付けしたもんだぜ？ ブイヨンの代わりにコンソメでもいいけどな。

ローストサンドに手を伸ばし、齧る。サーレタスとチーズに挟まれた鴨肉を齧ると、温かくコクのある肉汁が染み出してくる。美味い。

「どうだ、食べる楽しみを覚えやがれ」

「美味しいんだけどさあ……なんつーか、腹が減つてた方が落ちつくつつか……」

「少し筋肉付けたほうが、カッコいいわ」

「やつベー急に食欲が沸いて来たぞー？ うん、美味え！」

単純だな、お前……とでも言いたそうなワーグナーを無視し、食べておく。筋肉筋肉、筋肉センセーションだ！

そんな食事をしていると、急に誰かが来店。……つて！？

「あ、国王じやん！ どうしたんだよ」

「いつも思つたが、フレンドリーじゃなお前……」

「何の用だ？ 僕は今、筋肉に田覚めつつあるんだ」

「そんなんさくるしい事をしておる場合ではないぞー！」

「お前……一体何をしたのじゃー？！」

「お前……一休何をしたのじゃー？！」

「あー……？ 何々、『聖アバラスター王国は、勇者キルシユの登城を所望する。条約締結もついでに、彼へと一任させたい』」

「何かしたじやろ！ あの失礼な手紙を後から送ったのか？」

「まさか！ 僕の思いを込めたラブ レターを内封しといただけだ

「それじゃあああああああああっ！！」

国王の悲鳴は、この狭い酒場で悲痛に響いていった。

「どんまいっ」

「可愛く言つでないわ！」

あ、聖アバラスター王国に行く事になりました。

相変わらずの「アレ」は病氣過ぎる。

パワポケ14！ 准が……准が攻略できちやう！？ 現在、突撃甲子園を制覇し、札侍と魔球リーグを順次攻略中。てか、魔球リーグがムリゲー臭い件。ねえ、あの最後のヤツ勝てるの？ 何で1v3の必殺魔打法をバンバン使ってくるの？

楽しみながらやつております。二回、D's投げた（笑）

短め。

二章 傻い容姿のお姫様／ウホッ、もあるよー／ 中編

で、書を出してから、メルキュールは戦々恐々としていた。

かつて、これほどまでに恐怖した事があつただろうか。そのレベルにまで、彼女は怖がっている。

「お、お兄様……！」

「む？ どうした、腹が痛むのか！？ もしや産氣づいたとーー？」

「私まだ処女です！ つて言わせないで下さい違いますよ！ 勇者様のことです！」

「そうか。残念ながら、時間が掛かっているらしいな

「わ、私、街に行きたいなあ～なんて思つていてるんですけど……」

「ダメだ。どうせ酒場で歌うだろ？ あんな場所に行かせられるか

「ううつ……逃げたいだけなのに……」

何にでもものを言うのは、田頃の行いである。

それを身にシッカリと刻み込んだ瞬間、突如上方にある窓ガラスが割れた。……なんで？

エトワールを引き寄せつつ、ロープでガラスの破片を払い、彼女を姫抱きするように着地する。流石は俺、スタイルッシュだ。

「いやー、着いたな。どうだつた、エトワール？ 快適な空の旅

「素晴らしいけど、一度と体験したくないわね」

「清々しいお世辞をありがとよ、帰りは馬車で帰らうぜえ」

「嫌。歩いて帰りましょ？」

「体力の無い俺にそんな事を……つて、ああ忘れてた。俺様、スタイルッシュに参上！」

「無駄に見得を切るのね。素敵よ？」

拍手を受け取りつつ、呆然とこちらを眺めている青い髪の一人へ、丁寧にお辞儀して見せた。

「御召集の命にて参上仕りました、キルシユです。不躾な参上にさぞご不快でしようが、迅速にこの場へ赴く最適な手段として、空を駆けるを私は選び、実行致しました。今ここで数々の不敬を致した事を、どうかお許しあげたい」

「ああ、構わん。迅速な対応、實に見事だった」

「いいの！？」

少女の方が驚いてい うわ、むつかや可愛い！ 何々、妖精！？ はあああ……こんなかんわいい子がいるんだな、世の中広いぜ！

とは言え、もう少し猫被り。おちつけ、まだ慌てるような時間じゃない。

「つきましては、我が故郷であり守るべき国 エメラキスカと、ここ聖アバラスターとの繁栄に繋がる一歩として、友好条約を結びたいと王も、そして私も願つております。私に一任されると誓つ」とであるならば、是非今すぐにでも賛同して頂きたい

「受けよづ。正直、そちらの申し出はありがたい。エメラキスカの属国も、これで表向きは友好的に接してくれるだらう」

「何かあれば、私にお申し付けください。友好条約を結ぶ以上、勇者の私にとつてここは第一の故郷となり得る。そこをより良くする事に労力を惜しみませんし、または侵略せし者を捨て置けません」

毅然と言い放つ俺に、エトワールも少女も目を丸くしてゐる。あれ？ ねえちょっと！ 僕プライベートと仕事はキツチリする方だよ！ え、嘘だろって？ フヒヒ、サーベン♪

ともあれ、青年の質問は続く。ああ、「イツもやたらイケメンだな。耽美系のイケメンってヤツ。細い瞳と長く青い髪が、流麗なシリエットと相俟つて女性に見える。

「貴君は何が秀でている？ アピールポイントとウイークポイントを三つずつ、答えて頂こう」

「私は魔術、武器知識、またその一つの応用、対処を心得ております。ウイークポイントは内包魔力が賢者達に劣る、体力に欠ける、

私情で判断を下す傾向にある。以上です「

「心得た。オレはメルクリーオ・アバラスター。現在は王だが、若輩者だ。敬語はこれより不要、十年来の友のよつに話せ」

……こいつ、結構な変人だな。恐らくは、既成概念にとらわれない。

普通、敬語は不要と言つてくる輩は、口だけの事が多い。敬語を使い、敬つている素振りをしないと、不快感を露にするのだ。しかし、そう言つるのは目でわかる。こちらの対応で、器でも測つているのだろうか。……まあ、ただの天然だろうが。

「おうよ、俺はキルシュ。まあ、役に立つぜ？」

とりあえず、こちらも真つ向からぶつかつてみる。男は度胸だ。どうやら正解だつたらしく、メルクリーオは微笑を浮かべて、手を差し出してきた。

「よろしく頼む、お前は信用できそうだ。オレの事はクリオで構わない」

「ダサつ！？ なんだよそれ！ せめてメルにさせてくれ！」

「……ふむ、クリオはダサいか。なら、メルと呼んでくれ。それと、この文献を自由に閲覧しても良い。興味があるだろ？」

「マジで！？ いやあ、聖アバラスターって言えば魔術書庫だしさ！ じゃあ今度、お勧めの魔術書を見繕つてくれよ！」

「ああ。それとオレも少々だが、魔術使える。もつとも、威力の低い金属と水だがな」

「威力が低くても、活用する方法はある。」ながら、金属との相性もいいしな。今度、教えてやるよ」

「それは心強い。……どうした、メルキュール。そんなに呆けた表情をして」

「あ、え……？ あのー……この、手紙を書いた人……ですよね？」少女はそいつて、俺の書いた素晴らしいラブ レターを渡してくれる。ん？ 間の が無駄にイラつとくる？ あのつまらん日常系がブレイクした理由である 様になんて事を… 許すん！

「おお、これは紛れも無く俺の書いたラブレター！ うーん、やっぱ君すんごく可愛いなあ……！ ……お兄様！」

「む？」

「妹さんを俺に下さい！」

「私への好感度ゼロで言つたああああああああつ！？ あのワープレターに相当の自信もつてましたああああああああつ！？」

「よし、ならば条件だ！」

「嘘でも戦争してみせるつて氣概を見せてほしかつたでお兄様あつ！？」

ほうほう、思い切りのいい突っ込み……ヒトワールのショールで的確な突込みとは違い、勢いがある。中々の逸材やないが、ホンマに芸達者やなあ。

そんな事を考えつつも、頬のニヤけが止まらない。うへへへへ、条件次第とかうへへへへ！

「うへへへへ！」

あ、声に出ちやつた。

「あー？ ほ、ほらお兄様！ あが彼の本性ですよ！ 妹を売るなんて、絶対にしないで下さいね！？」

「馬鹿な。ただ一人の可愛い妹を、売るわけが無い」

「お兄様……！」

「託すだけだ」

「結論変わつてないです、ひひひひひひひひ！？ ああもう何かもう……にやああああああああああああああ！」

なんだか色々やりきれないのか、王城を飛び出していつたメルキユール。溜まつてんのかな、あの子。

「すまないな、妹はどうやら癪癪持ちらしい」

「違うと思つわ」

すかさずヒトワールの突込みが入るも、メルクリーオは条件とやらを聞かせてくれる。

「その条件と言うのはだな、最近ある組織が肥大化しているんだ」

「それを潰せつてか？」

題などか

……ちょっと、心揺れ動く俺だった。いや、山賊に組しようと
考えてないけどさあ、男ならうひうと興味あるじやない？

まあ、」の国から追い出す程度でいい。被害者

—
...
h?
—

少子化……？ 山賊で何で少子化が発生する事態が起つるん
だ？

山賊つてのは、基本的に真っ当に稼ぐ事を止め、略奪と支配による関係が続く組織だ。故に撃もあり、発展途上の組織は士気が高く仲間内のコミュニケーションも盛んで、中々手ごわい。なぜなら、犯罪と言つタイトロープと一緒に渡れる人物同士だから、強い信頼が無ければ成立しないわけで。下手をすればどつかの騎士団よりも強いかもしない。

で、基本は女性も奪うのだから……もしや！

ヤツベえ、寝返りてえ！
勇者なんてクソ食らふんだ…

「だが、男だ」

卷之三

猛烈に悔しかったが、まあそれはいい。潰すだけだ。
「まあ、いいや教えてくれよその場所。そ二

「ええ、いいんだから」

「悪を滅する行動理念は？」

善悪関係無しに、俺の邪魔するオジは禍根より焼き飛ばせ

と、買い物袋を持つて駆けて来た一人のメイドが、息を切らして

まくし立ててくれる。あ、あのメイドさんメッチャ美人！　エトワーヌ

ルよりも少し年上ぐらいで、可愛い系のまたプロポーションがいい
モツコリ美女様じゃああーりませんか！ もう俺この国に住む！
「王！ メルキュール姫が…… も、攫われました！ 例の、山賊グ
ループ、です！」

「何！？」「ふーん」「俺、山賊に寝返るうかな」

三者違つ反応を見せ、キルシユだけにメイドの投擲した林檎が放
たれたのは言つまでも無い。……[冗談やん、メツチャ痛いわホンマ。

三章 傷い容姿のお姫様～ウホッ、もあひー～ 中編（後書き）

敵サイドについたって、RPGやって何度か思う事、ありますよね？（ねえよ

二章 傷い容姿のお姫様～ウホッ、もあるよ～ 後編（前書き）

アツー！ な展開を含みます。

苦手な方は、ご遠慮ください。まあ、最後のほうに口直し的な何か
がありますが。

急に荷馬車へと押し込められたメルキュール。まさか、街中でこんなに強引に誘拐されるなんて……！

魔術で抵抗しようとも思ったのだが、布を噛まされ、喋れない。音声魔術は発動不可なんて、もう絶望的だ。

と、攫つた一人の男の人が、人懐っこい笑みを浮かべて見せた。あれ？

「へへっ、安心しろよ嬢ちゃん。あんたは餌に過ぎない。あの男を連れ出す為の……」

「おい、サブ！ ペラペラ喋るな！ そんなだらしねえ口は、帰つてからじっくりと調教してやるからな？」

「は、はい！ お願いします、ジブさん！」

「え、なんだうつ。一瞬、何か薔薇のようなものが見えた気が……。

「それよりも嬢ちゃん、悪いがしばらく牢屋に入つてもうつせ？ なあに、ちょいと知らない世界が展開されてるかも知れねえが、気にするな」

知らない世界？ 何か、わくわくしますね！

能天気な事を考えて恐怖を紛らわしつつ、メルキュールは荷馬車に揺られてドナドナされてゆくのだった。

「くそ……！ 勇者よ、早く助けに行くぞ！」

慌てているメルクリー オだが、そうまだなのだ。まだ慌てる時間じゃない。

「えー……」こはお兄様がスタイルッシュに助けに行く場面じゃね

？」

「む？」

「迫り来る追つ手をかわしつつ、馬車を操る御者を倒し、華麗に妹

を救出。そして、拘束を解いた彼女に、こう語つたのである。『もう、好

かあ～つ！ いい男だねえ、メルクリーオ！」

「そうか！ それで妹の外出率が減るわけだな！ 流石は勇者、良

「新約全書」

乗せられてるわよ、貴方……」

高位の狩人服に身を包み、メルクリー才は颯爽と駆けて行つた。
行動が早い、いい王になるだろう。

た。

「それにキルシユも。絶好の機会でしょ？　あの子のハートをキャッチする」

いや、おの姫様に迷いが三歳にはなつた。他の魔女たる者ら、居場所も分かる。救出なんてあつちゅー間だ。

「な、なん、か？」

紅葉の湯田 カツコいい！

「……………？」

「美味しいとこだけ頂こうかなあと……」

「どう? それこそ、」

「？」

「発展途上なら、結構な宝物が眠ってるはずだしな！ 捕まってる

「人達を殴ってお宝も儲けて！
ガッホガッホのハハハハよ！」

そのジト田が妙に来る。……ああ、俺つてやつぱり Σ なのかもしれないな。

メルクリー才を追い越して、キルシユ達は一足先に山賊のアジト

へとやつてきていた。

警備は普通だ。要所要所に一人ずつ。基本的過ぎて、なんだか笑いがでてくるほど。いやあ、テンプレ通りで助かっちゃうな。

そう、宝物の保存場所 所謂宝物庫は、牢屋の上に設置されたいた。お約束過ぎるだろ。

「宝物庫へ、ふんふふ～ん」

適当な鼻歌を口ずさみながら、力チャリと扉を開ける。鍵が掛かっていたのだが、針金の束のような代物で、難なく俺は開けていく。ほら、盗賊の心得はあるしな。

「馴れてるのね」

「昔、ちょっとな。あ、ほれ」

「ん？ ……刀？」

手渡されたエトワールの表情には、戸惑いが浮かんでいた。見てみぬふりをしつつ、武器の性質でも語つておく。これは東洋の文献で読んだ。

「そうそう、『宝刀・桜花炎』だな。抜けば花散る炎の刃、ってな。……お、『夢幻の剣』まであるじゃん。流石、溜め込んでるなあ」

『夢幻の剣』は、謎の透明な鉱石で作られた剣で、光などを弾く特性を持つ。また、魔力を剣に通すと、その特性を具現する性質を持ち、例えば水の魔力を入れると剣が青く輝き、血で汚れなくなる等の効果を得られるのだ。

一般武器の鞘に入れ、腰に括りつけておく。あんな馬鹿高そうな鞘なんぞに入れて使うなんて、馬鹿のする事だ。

刀を見つめて、瞳の光を揺らしているエトワールに対し、やはり尋ねてみた。

「……刀に、思い入れでもあるのか？」

「昔、ちょっとね」

「ふーん。ま、いいけどな。次ぎに行こうぜ、次！」

お宝がっぽり！ うんうん、満足満足！

次々に倉庫を開けていく。が、武器ばかりで魔術書やらは無い。

武器も、あの一つ以外は心許ないものばかりだ。いや、高価なのは高価なのだが、実用に耐えない装飾品としての武器ばかりだ。

「どうにも、こここのボスと趣味が合わねえなあ」

「そう? 結構、いい趣味してるわよ?」

「いやいや、剣は究極の武器だろ? それを眠らせておくのが、理解できねえ」

「理由は? 私は結構何でも使つけど、剣が最強だと思ったことは無いわね」

「……剣は、全ての特性を持つてるからな」

「?」

「槍の突く、斧の断ち切る、弓矢の穿つ、宝物としての飾る。全て一本で出来る。勿論、全てが特化したそれらに勝るわけじゃないが、剣を極めるつてことはそれらを全てこなせるつて事さ。だから、俺は剣が一番強いと思つ」

「……ふーん」

「ありや、俺と合わなかつたか?」

「いいえ、見直したわ。剣とか、貴方は使わなさそつだし。そう言

う武器関連の事、良く知つた上で魔術を選んだんだつて」

「そうだな……ん?」

何か、聞こえる。

いや……耳を澄ませば聞こえない事も無いだらうけれども、俺の勘がそうするなと告げている。何か、嫌な予感がするのだ。

「何か、聞こえてくるわね」

「鐘が鳴つて鳩が飛び立つ的な?」

「その聞こえるを覚えている人はどれくらいいるのかしら。て言つか、男の人の声よね」

「……ああー、何となく分かつた気がする」

「どうして、メルクリーオは少子化といったのか。警備が何故、一人ずつしかいなかつたのか。他の連中は何をして

いるのか。

……嗚呼、最悪だ。

そう思つた刹那、聞くのもおぞましい男の嬌声が、廊下中に響き渡るのだった。

え、あの……ええつ！？

サブと呼ばれていた男の人と、ジブと呼ばれていた男の人、二人に組み
伏せられている。

「あの、シフさん……見てますよ？ 人か……」「でも……結構、好きだろ？ そう言うの……ほら、シャツを脱げ

「お、もし……？」

肉質の体が剥き出しに！？

てさて

「ちゃん」

良くないですか！？

「それに、氣を紛らわそうとしても無駄だ世? 知つてるだろ?」「ノン気だつて……喰つちまう、男……ですよね? で、でも……

「どうだ、俺のモノは」

「…………凄く、大きい…………です」

「見苦しいわあ あああああああああああああ
アツー！」 「あああああああああああああ
つ！？ 」 つ……

聞き覚えのある声がしたと思った刹那、壁を撃ち抜いてきた何かが男の人達を打ちつけ、倒してしまった。

肩で息をしつつ、やってきたのは……キルシユさん！ でも、何か勇者にあるまじき凄まじい形相をしてるよー？ いいの、子どもの夢が台無しだよー？

「ああ、たく！ ハーレムファンタジーだつてのに、何でこんなヤバい絵図らが出て来るんだっての！ やるなら女子にしろー」「何か見当違いなことで怒つていいみたいだけど、嗚呼……なんだか、勇者みたい。いや、勇者なんですけど。

腕の拘束や口の布を取ってくれて、キルシユさんは手を握つてくれた。……あ、震えてたんだ、私。……よく、見てくれてるなあ。「こんなおぞましい場所、とつとと出ようぜ。気が狂つちまう」頭をかくキルシユさんだけど、隣の美人さんが勿体無をそうに咳いていた。

「そう？ セイきの構図、美少年だつたり……美味しいのに」「止める止める今の俺の脳内ライブラリに展開されちまつたじゃねえか！？ ……って、大丈夫か？」

「……なんだか、新世界を見ていた気がします」

「そう。あれはね、女子の夢」

「やめい！ ここつてまさか……有名な発展場じやねえのかー！？」

「 その通りだよ、勇者キルシユ」

何か出てきた。凄いの出てきた。

筋骨隆々で、身長は百九十センチを優に超え、服装は黒革のブーメランパンツに、股間の例の部分に何か金属の突起がついたやつを着ていた。

如何にもな……ゲイだ。

「お前が頭目か！」

「ああそうだ。ゲイルと名乗っている。……お前も、中々にいい男

だなあ。筋肉質の男もいいが、偶にはそう詰つなよつとしたのも食べたくなる」「

「……ではゲイ仲間を集めて、いい男を捕らえてくるように命じてある……。予定は変わったが、君でもいいなあ、結構そそるよ……！」

ぎやああああああああああああああ

筋肉をぴくぴくさせて、じれりにゅつくりと歩み寄る様は、もうホラーだよ！ 助けてええええつ！ 誰か、助けてええええつ！？

「灯し、焼き尽くせ！ 展開するは煌々たる炎！ 我が道阻む怨敵を、その腕にて握りつぶせえ！ 振り抜くは炎神の腕ア！」
かなり本気の炎魔術。もうこれしかない！ 冗談じゃなく本気の魔術だ！

炎の塊が腕のようにケイルと名乗った男を襲うが、彼はその熱で何故か興奮していた。

「OH～！ YEAH～！ 热い、热いよオ！ 燃えてきたあああああ！」

「フツ、」の股間の金属は受けた魔術ダメージを蓄積し、性的快感に変える道具だ！ 最高の宝物よオ！」

「付けるな付けるな外しちまえそんなもんッ！」「騒ぎ立てる俺を、呆れ混じりにエトワールは見つめていた。

「……珍しいわね、貴方が押されてるつて」「アリギー、デイはアリー、つか、筋ナギニ

「おやおや、そつちが来ないなら、オレがそのだらしねえ穴に一発入れてやるよ！」

と、輝きが現れ、それが一点に集まっていく。

そう…… 一点。股間の部分に。

「シビれる快感！ オレに後ろの純潔を捧げるがいい！ イクぞ、性なる槍！ ゲイ ボルグ！」

凝縮した輝きは紫電となりて、腰の振りと共に発射された。おまけに、避けたこちらの尻を執拗に追い回していく。

「あ、あぶつ！？ 何これ！？ 恐いんだけど！？」

「逃げるな。これをやられれば、お前は新たな世界に目覚めるだろ

ג. י. ע

「田原めたくねええええ

「
フッ！
」

エトワールの剣閃により、雷の魔術は霧散した。

雷撃よりも鋭く、速い。粒子を書き消すだけの剣速を、その細腕で彼女はやってのけたのだ。

「……ほつ、お前。女の癖にやるではないかー！」

「そう？ それに、貴方はもうチェックみたいよ？」

と、股間の金属を何かが撃ち抜いた。
矢だ。

ツ !

じゅやら、股間の快楽神経と接続していたらしく、ピクピクと全身を痙攣させて、泡を吹きつつ氣絶してしまった。……最後まで至みねえ絵図らだつた。吐き気がする。

奥からメルクリーが現れ、合流した。

「一矢报いに、性交を何度も求められたが、全て殴り倒しておいた。

……あれは未知の誘惑に満ちていたな。……つと

流石に肉弾戦は不得手なのか、メルクリーオは倒れてしまう。

不安定な体勢で俺が受け止めたのが運の刃で、折り重なるみづして床へと倒れてしまつ。

「す、すまない……」

「うーん。『隣にすんなよ』

「ぶつはあ……！？」

刹那、ヒトワールの鼻から夥しい量の血が吹き出していた。……ああ、そう言う構図にも見えるわけか。腐つてやがる。

「だ、大丈夫ですか！？」

立候。そこで病になつてないか。用を服がしてゐて

「方舟」

絶え、風せ、凶に傳る、阿の風、
波の濁モ、衝撃を呑め入が、眞無

起き上がり、外へと出ると同時に、俺は手を掲げた。

「櫻井が死ぬ!! 七瀬の えあああああ!! ..? ..

そんなメルキュールの突込みを聞かれて、

詠唱で繰り出した。

その発展場は後に、伝説の出会い待ち場として賑わう事になるのだが、今はまだ瓦礫の山。先の話になりそうだ。

「いや、まさかオレが狙われようとは……キルシユ、すまなかつた」「……いや、いい

もう答える気力も無く、カリペットの上に胡坐を擣く。

王座に座ったメルクリーおかそれを聞いて頭を下げる。その陰に隠れたメルキュールが、こちらへ歩み寄り、何かを差し出してくれ

た

元の計画。

水の魔力の威力を高めてくれるもので、水の魔素が高い場所で生

じる事がある物。中々高価な代物だ。

おにかどくのうじた

「ああ……もうダメだ」

精神的にも肉体的にも限界らしく、もつての場所で倒れてしまつた。

泥に引きずり込まれるかのよつた睡眠感覚に踊られ、もつてへくに感覚が無い。

だから……さつと、頬に柔らかいものが当たつたのも、さつと気がせいだ。

……ちくしょ、俺の馬鹿あ。

四章 突撃、魔族のメイドさん！

「」

歌姫、メルキュール・アバラスター。

可憐にして純粋な歌声は、人々を元気付ける。

明るく、歌に対して真っ直ぐなその姿勢は、男女問わず好感を抱かせ、その人を惹き付けるカリスマ性たるや凄まじい。

「……っと！ 終わりです！」

酒場が歓声に沸く。無論、その観客の中には俺がいるわけで。

「どーだいメルル？ エメラキス力の酒場は」

「みんないい人ですね！ 気持ちよく歌えるから、いいですよ！」

「バーク、お前の歌がそうさせてるんだよ。流石は歌姫だ、歌がこんなに心地良いなんて知らなかつたぜ」

「え、えへへ……」

彼女の歌を聴いていると、気分が楽になる。

ここ、ワーグナーの酒場には、流し 所謂、楽器の弾き手や吟

遊詩人が集まる事がある。

彼らは金を求めて弾き語りをしている。その他の情報なども彼らが語り、貧乏な村でなければ歓迎されるものだ。

「おおーい、チップはいいから彼女に何か奢つてやつてくれよ！」

「んじゃミルクか？ 早く大きくなれるようにな！」

「バーク、そこは果実ジュースでも気前良くなつてやれつてんだ！」

「言つなあ、色魔勇者め！ よつしや、パインジュース奢つたらあ

！」

酒も入つて、ほろ酔い状態の客を煽り、奢つてもらう。

意外にもこんな雰囲気に慣れているのか、メルキュールは笑顔で差し出された氷入りのジュースに口を付けた。

「美味しいです、ありがとうございます！」

「なーに、気にすんな嬢ちゃん！ また歌つてくれよな！」

「はい！」

何だかそのやり取りが微笑ましく、そして眩しくて、見ていられなかつた。

ワーグナーの訝しげな視線を受け取つてていたので、応じる。おおう、不細工だ。

「今、なんか失礼な事を思わなかつたか？」

「まっさか」

「……今日の飯だ」

相変わらずの仏頂面。もう四十になるつてのに、独身なのはその不景気な面が問題なんじゃね？

思いつつ、置かれて行く品々……つておいおい！

「うえええ……多いつて。ロース肉のビーフシチューにカイザーゼンメル、おまけにあまつた鴨肉のサラダ……嫌がらせか？」

「ビーフシチューにはガーリックとオニオンのチップスを添えてる。体力付けとけ。お前、最近なんか疲れ過ぎだぞ」

「……ンな事あねえっての。けどまあ、最近魔術とか使う機会が増えたしなあ」

「その似合わねえ剣も機会とやらで貰つたのか？」

「盗品だ。いるか？」

「いらん」

話を逸らしつつ、木のスプーンでシチューを一口。うん、良く煮込まれた牛肉が柔らかい。赤ワインで一度臭みを飛ばして豪快に焼かれてある為か、シックカリと歯ごたえがある柔らかさ。口クのあるブラウンシチューは玉葱とブイヨンの香りが強い。この店のスープを水代わりにしているらしく、安心する味だ。

「美味しいだろ？」

「ああ。……なんでアンタ、モテないんだろうな」

「フンッ！」

「いදえ！？ つていらー 叩くな！ 僕の優秀にして究極の脳細胞がお亡くなりになつちまうだろ！？」

「桃色の部分が抜けた事を期待してな」

「あー……メルキュールたんとちゅつちゅしたいおー」

「悪化してやがる！？」

溜息をつきながら、ワーグナーは注文を受けてどこかへ行つてしまつた。

今、メルキュールはエメラキス力に滞在している。

と言うのも、彼女の奔放振りを見かねた王が打診していたらしい。少し広い世界を見てやれば、大人しくなるのではないかと。多分間違つてゐる。世界の一端を見てしまえば、全容を見たくてたまらなくなるのだ。箱の中に何が入つてゐるのかも知らず、それが良い事でも悪い事でも、中身を知つていても……人は開けたがるものだ。

知つていて咎めなかつた俺も俺だが、ちゃんと護衛も付いている。首元を冷やす鉄の冷たさを覚えつつ、両手をゆっくりと挙げた。

「今、姫様に不敬な発言をしました？」

「じょ、冗談やがな、ホンマ短気やなあ」

「あらあら、それじゃあもうちょっと紳士的に頼みますね？」

「ですが、俺の愛馬は凶暴です。なんせ、毎晩毎晩嘶いていますからね」

「切り落として差し上げましょつか？」

「いやん馬鹿冗談じやん！」

思わず股間を庇つた事で、カウンターテーブルに乗つた料理が見えたらしい。どことなく目を輝かせ、鮮やかな桜色の髪を揺らしている。

「あ、シチュー……」

「ああ……良ければ、貰つてくれ。こんなに喰えん」

「え？……あの、女性でもこれくらいは食べますけど」

メイド服を纏う、この場なら給仕である女性 ほら、あの林檎

投げてきたヤツ が、心配そうにこちらを見てくる。

「食べなくても大丈夫なんですか？」

「食べなくても大丈夫なんですか？」

「ああ、あんまり食が太い方じゃない」

「どこもじゃないです！ ちゃんと食べないと、死んじゃいますよ

！？」

「あーあー、はいはい。んで、貰うか貰わないのか？」

「……頂きますけど」

「おひ。こここの料理は絶品だからな！ そりやあ城みたいに上品つ

つーか味薄くはないけど、美味いぜ？ んじやな」

これ以上ここにいると、どうせワーグナーが追加の料理を持つてくるに違いない。

賑々しい酒場の喧騒から弾かれるように、俺は店を出た。

「 キルシユの事を調べてほしいだと？」

エトワールはメルクリーイオにそう頼んでいた。

あの後、気絶したキルシユを送ったその後だ。聖アバラスタに戻り、王に直接掛け合っている。

「ええ、そう。しばらくこここの騎士達に剣を教えてあげるわ」

「それは助かる。我が騎士達は明確な実力者がいない。しかし、君達は親密な仲かと思つたが……」

「つい最近、知り合つたばかりよ。……彼、多分だけど、何かあつた人だと思うわ」

「それはオレも感じた。面白おかしいヤツだが、何故か……暗いものを感じる。それに魔術の腕、若くして知識の含蓄、オレも気になつていたところだ」

両者合意し、エトワールは寝所の指示を貰い、その場所へ赴く。

「……そうよね。私だけ裏を知るのは、卑怯よね」

歩きながらの咳きは、どこまでも続く廊下に反響し、やがて消えていった。

この後、美少年が住む宿舎から、パンツが何枚か盗まれていた事と彼女については、きっと関係ない。多分、関係ない。

夜の風に当たりながら、魔力を制御していく。

零れていく赤の燐光。それは次第に蒼へと変わり、そして緑に変わつていった。

円を描きながら、燐光は花びらのよう回つていいく。月のない晩に、その輝きはより一層、美しさを増していた。

最終的にそれは白と蒼の入り混じった輝きとなる。炎のようだいて、その実、冷たい。まるで、心を映しているかのような変化は、唐突に消えた。

「……受けていたのは、姫護衛と俺の暗殺か？」

「いいえ？ ですが、ちょっとと……ここで旅に出ていただこうかと。勇者は旅に出て、そのまま戻つてこなかつた」

「そう言う筋書きかあ。……やれるとでも？」

「メイドにも色々あるんですよ？ まあ……私みたいなのは、極少数ですがねッ！」

思い切りの良い踏み込みから、抜き打ちの姿勢を保ちつつ迫つてくる。成る程、抜き打ち 居合いは防御型の剣術だ。定石を崩す事で、動搖を誘つているのだろう。

しかし、まあ……良くも悪くも真っ直ぐすぎると。

「紡ぎ、圧せ！ 解き放つは風の双弾！」

白刃取りをしながら、両の掌に集めていた風の魔力を放つ。

結果、刀は別々にかけられた風圧によつて押し折れた。

咄嗟に飛び退いたのはいい判断だ。 相手が、ちょっとと悪かつただけ。

「流れ、払え！ 打ち払うは水流の打鞭！」

発動させたのは水の魔術。粘度を高めた水を勢いのまま振り回し、濡れタオルを顔面にぶつける要領で放つた。

魔力を込めているので、普通の人間には触れると抵抗できないものだ。

が、目の前で起つたのは……その鞭をカフスに包まれた手で弾くメイドの姿。

雲が晴れていく。そこには満月があり、降り立つた月光は彼女を幻想的に照らした。

「……半魔、いや純粹な魔族だな。しかも、目立つた特長がない。目が輝き、人の姿をした高位悪魔の種族 そうか」

「流石ですね。そう、目が月光で紅く輝くんですよ。上手く隠してきたんですけど、知識が半端じゃないですねえ」

「つてことは、魔王系か」

「そんなご大層なものじゃないんですよ。まあ、バレたんなら、こんなおもちゃに頼らずとも……！」

持っていた鞘をあつさりと両手で縮めてみせる。開かれた手にあつたそれはもう、小さな金属の塊でしかない。

「特殊能力を持たない代わりに

「身体能力がインフレなんだろ？ そつまでして、か。……なら、俺も披露しないとな！」

そう言つた彼 勇者キルシユは拳を打ち鳴らし、ロープを脱ぎ

捨てました。体術を使うつもりらしいですが……

「……魔族に敵うとでも？」

「ああ、多分……お前じや見えないし」

刹那

「ぐつ

鳩尾に衝撃が来たと思った刹那、

「がはア

刹那、刹那、刹那、刹那。

その攻撃は全て、瞬間で行われているのでしょうか。普通の人間ならば致命的な打撃を、どういづわけか人間が行使してきます。

「な、めるなアッ！！」

拵った腕を掴まれ、勢いを逆手に取られた拳銃、蹴倒されました。

……速い！

「あ、あなた……！ 魔術師ではなかつたのですかー…？」

「あー？ だから、最初つから言つてんだろ……？」

彼は何か胸元に手を え、ちょ！？ 今、胸に全く触れずに……！

「俺は、勇者（笑）だ」

「ヤア～！」

ブラジャーを片手にそつ笑つた彼を、次の瞬間私は全力で殴り飛ばしました。

どうやら「キブリ並みの生命力があるらしく、痙攣しながら彼は笑っています。凄いです、エロに関するの執念。

「うへへ……可愛いモツコリ美女ちゃんのブラジャー……！」

満足そうに笑う彼からそれをひつたぐると、彼は泣いてすがり付いてきました。妙に愛嬌があります。

「お～い、返してくれよお～！ 俺のブラジャーちゃん～！」

「や、私のですから！ と言つか見つとも無ー？ ホントに勇者なんですかあなた！？」

「まあそんな不確定要素満載な疑問はさておき」

「置いとかれた！？ と言つより勇者に不確定要素が！？」

「ねえねえ！ 俺のハーレムの一員になつてちょーだいよお～！」

「あ、あなた……！ 魔族なんですよ、私！」

そう叫んでもみても、彼の表情は変わらず、それどころか溜息までついて見せます。

「で？」

「えつ……？」

「いや、魔族だから、何？」

「だ、だつて……き、気持ち悪い、でしょ～？」

魔物の仲間だと言うだけで、非難されきました。
石を投げられるならいいんです。言葉も、もうなれました。でも、

もう武器を持つて殺そうとしないでほしいんです。あまり、殺したくはないから。こつちは素手で、その事切れる感触が……怖くて、夜、眠れません。

他の人間が、気持ち悪いと思い、剣を向けた。それだけの行動が、全員に伝播するのは簡単なんです。

みんな欲しいんですから。団結して敵うレベルの、敵が。でも、彼は何を言つてるんだと言わんばかりに、呆れて見せていました。もう鼻息が凄いです。どこから出てるんでしょう。「はあ？ いや、あんたメッチャ可愛いしメッチャスタイル良いし……ああ、辛抱溜まらん！ 胸揉ませて頂いても宜しいですか？」「いいわけないです」

「しょんな冷たい……」

本気でしょぼくれている彼は、何だか……怖がつて、ない？

「あの……怖く、ないんですか？」

「……怖いと思つてほしいのか？」

「つー？」

何、今の。心の奥を、揺さぶられたよつな……。

「どこか、甘えてんじゃねえのか？ 怖がつてもらえるつて。それを嫌がる素振り見せりや、同情くらいはしてくれるつて？」

「そ、れは……でも、あの動き！ あなたは、魔族では……！」

「ちやうぢやう、ありえへんがな。俺は正真正銘、クソ見てえな勇者一族に生まれちまつた男さ。ただ、悲しいくらいに才能がなかつた。良くあるだろ？ 良くできた兄、劣等感を持つ弟。そう言つ事だ」

「どう言う事？ つて聞く、雰囲気じやない。

飄々としているけれど、凄く不愉快だと言つ田をしてます。

「力で捻じ伏せれば、正義なのか？ じゃあ魔王が正義を振るつてるつて事になるだろ。略奪も、法的にいけないことは全て力で破れちまう。だつたら、そもそも、正義なんて言葉なんか要らない。勇者ってのは、正義の味方だ。けどな、正義つてのは必ず……人を殺

す。勇者ってのはな、こんな時代にやただのピエロなんだ。認めたくないって言つてばかりで、何もしゃしない。俺は子どもなんだよ」東のほうを一瞬憂いで、彼は表情を切り替えたらしいです、顔付きが変わりました。渋く、結構……カツコイイかもしません。

「大人と子どもの境界ってのは、まあ色々ある。けどな、俺はこいつ考えてる。無茶をしても、無理はしなくなる。自分の小ささを知り、惨めな思いをしてから……大人になるんだ」

「え……」

「俺はガキで、勇者でもないって事が。まあ、本当にそりやぢりでもいいんだよ。魔族だらうが勇者だらうが、モツコツするには関係ねえ！」

「え？ あの……手を取つて、何を？」

「俺のハーレムに入つてくれ！」

「あ、あの……？ わ、私の事を……密告しないんですか？ 魔族だつて……」

「ああっ！？ 知るか！ 俺の女に手え出すやつは、国だらうがドラゴンだらうが戦つてやらあ！ 文句言つヤシはぶつ殺す！ これでよし、完璧だ！」

強引な、しかも勝手に私も彼の女扱い……。

でも、不思議と嫌じやない。ああ、そつか……彼は、何もかもを受け入れてくれるんだ。

きつと魔族でも、魔物でも、可愛ければOK。ご都合ですけど、女として嬉しくないと言えば、嘘になります。

「……いいですよ？」

「え、そうなの！？ いいの！？」

喜色満点の笑みは、何だか可愛らしくて。

「はい！ いっぱい仲間を増やして、楽しく暮らしましょー！」夢でした。

友達がいっぱいいて、手を取つて笑いあつて、変な事をして怒られて……そんな日常。

彼なら、笑わずに受け止めてくれそう。そう思つたから、彼についていく。

「おおー！ やつたあ！ やつたあああああああああ

つ
!

!

夜中だと言うのにはしゃぐ彼
キルシュさんを、私は苦笑して
みていました。

と、家の人でしょうか。ここぞりと壁際にいた私に声を掛けます。

「彼のお嫁さんになるの？」

「ふふつ、彼は皆に好かれてるから。あんたも、きっと楽しいと思つよ?」

若い女の人には、それだけ言って奥に引つ込んで行きました。

あ！ 乃じ弔ひを刪つて、おまかせにいたす。

……あの訛り、なんなんでしょう。

げなく、がポイントだぜ？

「ぐへへ、メルル！」

ダメなのですよー！」

「やー、スキンシップスキンシップー、氣にしない氣にしないー。」

ハニン すべすへ！ いしお戻をやん！

た、
スミレだ。

「メルキュール様、可愛らしいですね！」

「ちょ、ええつ！？」
スミレ！ あなたあんなに彼を嫌つてたじや
ないですか！」

悲痛な叫びも、そ知らぬ顔をしつつ頬に指を当て、じちらに向かつて含み笑いを浮かべてきた。こいつ、中々い性格してやがる。

「はて、何のことや。ねー、キルシューさんー！」

「うへへーー！」

「ああもはや言語すら崩壊します！？ ちょっとキルシューさん！ ウチのメイドさんに手を出さないで下さいー！」

「あらあら、それじゃあメルキュール様も一緒にいちゃいちゃすればいいじゃないですか」

「う、あ……べ、別に、イチャイチャしたいわけじゃありません！ た、ただ線引きは、その、キツチリして欲しいだけなんですから！」

「ツンデレトクー！ みんな、喝采だ！」

酒場の皆は良く訓練されており、凄まじい拍手が沸く。サンキュ

ー、お前ら大好きだぜ！

「だ、誰か……まともな人おおおお

「呼んだ？」そして俺である。

「呼んでもせええええ
んつーーー！」

歌を締め括るのは、悲痛な絶叫だった。うんうん、引きつった顔も可愛いねえ。

四章 突撃、魔族のメイドさん！（後書き）

仲間、1ゲト。

現在ハーレム構成。用心棒・エトワール、メンバー・スミレ
以上。

「うへへへへへへへ～！」

「あははは～！ もう、キルシューちゃん。胸はいきなり揉まないで
くださいよ～！」

「うへへー！」

「え、褒めて頂けるのは嬉しいんですが……そのお、やつぱり人前
だと恥ずかしいです」

「うへへへへ～！ うへへ、うへへへ～！」

「でも、そんなのが好きなんだろうって？ それは貴方でしょ～？
……えへへ～！」

「感染した！？」

そんなやり取りを黙つてみていたメルキュールが、よつやく突つ
込みを形にできた。

キヨトンとしている一人に向けて、高速の言葉を並べ立てていく。
その表情は可愛らしくも、鬼気迫っていた。

「あ・の・で・す・ねえ！ うへへー！ だけで会話を成立させな
いでください！ それと、い、いやらしいのは駄目だつて言いまし
た！ もう絶対にそんな事を言つたりしたりしちゃいけませんよ～。」

「そりが、分かつたぜメルル。お尻触つていいか、スミレー。」

「もう、ちょっとだけですよ？」

「うへへー！」

「ああもう～ 何一つとして伝わつてないこのもどかしさをビリに
やれば！」

頭をかきむしっているメルキュールはさておき、俺らは今、幸せ
の中にいた。

互いが互いを認め合い、キヤツキヤウフフ、イヤンバカンな関係
に……え、古い？ つるせえ！ いい言葉は古くてもいいんだ
よ～

結局、頭を抱えて酒場のカウンターに突っ伏してしまったメルキュール。そんな彼女へ微笑みかける、俺。うん、超イケメン。

「そんなに悩むことはないぜ？」

「悩ませている本人が言つと殺意沸きますね！」

「そ、そんなに俺のことで悩んでいたなんて……！ もう、照れるだろー？」

「ああああポジティブさがこんなにムカつくなんて！ 埋めてやりたいですよ！」

「俺の、心の隙間を？」

「これ以上なく満たされた表情しててまだ言いますか！」

「えへへー！ キルシユさん！」

「ああ今度はこっちが病氣に……！？」

「こりこり、えへへーだけで全てが伝わるようになないと

「まさかのダメ出し！？ 何なんですかこれ！？」

ひたすらに翻弄されているメルキュールだったが、それはさておいて。

「よし……行くぜ！」

前から気になつてたんだよねえ。

名前：メルキュール・アバラスター

LV : 2

職業：プリンセス

ステータス

体：10

力：2

技：3

速：5

守：0

魔：10

運：100

特殊技能

魔術・水、魔術・光、歌姫の心得、突つ込み一段

「なんか出たあああああ！？ え、何ですかこれ、私のパラメーター！？ 突つ込み一段つて何！？」

さつそく、その特殊技能を遺憾なく発揮しているメルキュール。うんうん、突つ込み姿も絵になるなあ。

しかし、項目の足りなさに、思わずひざをついてしまう。

「くつ……やはり、修行が足りねえか」

「ええええ！？ これでも異常だと思いませんよ！？ こんな事がで

きる人つてまずいないと思うんですけど！？」

「……スリーサイズを出せるようになりたいのに」

「公然堂々セクハラ宣言！？ やつぱり最低ですこの人！？」

愕然とメルキュールは口を開けていた。その口に昼飯であるイチゴのゼリーを突つ込んでやる。

「……甘いです」

「そうかそうか」

なんて事をしていると、目の前で星が散った。正確には、後頭部への衝撃の後に、だが。

「痛え！？ だ、誰だ！ 人が『はい、あ～ん』『あ～ん！ あ、甘くておいしい！ 貴方の味がします……』って脳内補完してる最中に！！」

「口クでもなさがマックス超えた！？」

「美女かと思ったか？ オレだよ」

「……ワーグナーかよ。んで、何でたたいたんだ？ 俺の肌色の脳細胞が活性化したらどうするんだ」

「これ以上があるのか！？ ……テメエ、オレの用意してやつた飯くらい最後まで食え！」

「腹がいっぱいなんだだつつの！」

「ゼリーしか食つてねえだろうが！ 何で動いてんだ妖怪か何かか

お前は！ 愛と勇気で動ける妖怪パン男か！？

「バー力！ 僕は今幸せでいっぱいなんだよ！ だから、飯食わなくとも愛を食う。なー？」

「「」飯を食べてくださいないと、もうチユツチユさせてあげませんよ？」

「おい、フィレステーキにライス、サラダもな。グレイビーソースで頼むぜ？」

「お前……それでいいのか？」

「勇者つて……何だつたんだろう……」

沈鬱な表情を浮かべる一人だが、ワーグナー 자체は良い傾向だとつぶやきつつ、厨房に向かった。……しまった、食べれるかな、俺。

肉が焼ける良い匂いがするのだが、食欲が全然わからない。ダメだ、昨日嘘嗟に肉体強化使っちゃったし。

「……で、聞いたか？」

ステーキやライスを並べながら、ワーグナーが語りかけてくる。

「何が？」

「夜の湖に、時折、妖精のような少女が水浴びしているらしい」

「……そっか」

ロリババ

きっと、あの少女の事だろ？ そうか、やはり解呪は成功していたらしい。うんうん、美少女はあるべきままが一番、こんな平和なニユースばっかり聞きたいね！

「お、どうした？ いつも節操ないお前が、珍しい。渋く決めるじやねえか」

「フン、既にエレキトリックな接触済みさ」

「意味が分からんがこいつ、出来る……！」

戦慄しているのか、ワーグナーは冷や汗をぬぐっていた。いや、あんたも結構、役者だな。

ステーキを切り分けて、ミディアムレアなそれをソースと絡めて口に放り込み、サラダを一気に詰め込んだ。

「美味しいか？」

「……不味い。だからメルル、あーんしてくれ」

「脳内補完を実行に！？」

と、スwingドアに豪快なタックルをかませつつ、登場した人物。

「おい、聞け！ 良い情報持つてきて」

興奮した面持ちの、見知らぬ大男。ふと、彼の周りに奔る銀閃ワーグナーの果物^{ベティ}ナイフだ。

「備品を大切に扱え、クソ野郎が。入るところから出直して来い「は、はい……」

鋭い眼光で射抜かれた男は、ただただそう頷くしかなかつた。

「良い情報つて何さ」

食事を平らげたキルシユへと、男は語る。よく見れば、こいつは街と村を行き来する行商人じゃないか。俺ももちろん、変態魂で熱い友情を結んだ仲である。既婚者だが、その情熱を理解できるなら、仲間である。美しき哉。

「ああ。南の村に行つたんだがな、可愛い嬢ちゃんがいるつて噂だつたんだ。これがまた可愛いんだが、喋れずに村人からは気味悪がられている」

「……で？」

「治せるのか？ 治せたら、その嬢ちゃんの保護者が交際考えても良いつてよ」

「ん……病状による。喉が悪いなら、ぶつ倒れるくらいに集中すれば何とかならんわけでもないが、精神的要因でそうなつたのはなあ……リハビリテーションくらいしか出来んぞ？」

たまにいるのだ。何かのショックで声を失う人物が。

ショックや弾みが、一番恐ろしい。一瞬で、掛け替えのないものを失う引き金となりうるからだ。

「ていうか、何でそんなに肩入れしてんだ？」

「いやあ……死んだ娘を、思い出してな。あいつも喉を患つていて、出来れば……助けて欲しいんだよ」

「……遠慮しとくよ」

サラリと拒否すると、黙つて聞いていたメルキュールが眉を吊り上げた。

「何ですか！ 治せるかもしれないんですよ！？ だったら、見てあげるべきです！」

「……お前、脳が足りないのか？」

捲くし立ててくるメルキュールをにらみつけ、俺は続ける。
「中途半端な正義感こそ、人を傷つける。中途半端に期待させといで、治せなかつたらどうする？ より病状が悪化するかも知れねえ。そうなつちまつたら、お前は自分が許せるか？」

「そ、それは……」

「俺も傷つきたくないんでね。真つ平じめんさ、医者としてその村に行くのなんぞ」

立ち上がり、自室に戻り、装備を整えてくる。
いつものロープ、夢幻の剣をベルトに差し、スwingドアを開く。

「どこに行くんですか！」

「あ？ ナンパだよ、ナンパ。ハーレム田指してんだから、日夜努力すんのは当然だろ？」

去つていく俺へ、罵倒の言葉が飛来する。メルキュールのものだ。
「馬鹿！ 勇者失格ですよ！ 勇者だつて思つてたのに！ 絶対に、私は貴方を勇者つて認めませんから！…」

答える気にもならず、俺は歩いていく。

風の向くまま、南の方角へと。

今日も、暗い一日が始まる。

外に出たくない。出たら、悪口を言われるから。言われても、この口は言い返す事さえ叶わない。

でも、お母さんやお父さんに迷惑をかけたくない。だから、笑つて家を出る。

手には一つの桶。井戸の水を汲んで、帰つて来る事が私の仕事。歩いていると、こそそとした話が耳元を掠める。

「難儀よねえ」「あそこの夫妻も、よく水汲みなんかにいかせるわ」「働いて結構じゃないか、ウチのぼんくらとはわけが違う」「四歳児に何期待してんだよ」

なんて事のない、朝の会話だ。

私とは関係ない事でも、そう聞こえてしまう。自意識過剰なのは分かつていてるけど、怖い。人の笑い声が、怖いのだ。

井戸のある広場に行くと、同じ年頃の男の子達が、私を見て話し始める。聞こえるか聞こえないかの、微妙な声で。

「あいつ、また来てるぜ」「喋れねえのに何しに来てんだか」無視して、水を汲む。

重いけれど、慣れてきた。コツは、腕全体を伸ばしてしまつ事。肩からまっすぐに、曲げないように取つ手を持つ。

けど、転んでしまつた。足が、差し出されたのだ。

それを見て、弾けるように笑う男の子達。大人たちの声も届かず、ただ、こちらを嘲つてゐる。

泣きたい。けど、泣いたら……余計に笑われる。

再び水を引き上げる。瞬間　　水が、浮いた！？

いや、男の子達の持つてゐる桶から、水が無くなつてゐる。どう

言つわけなのか、それは一人の男の人へと集まつていつた。

「おいおい、お前らいくらその子が可愛いからつて人にあたんなよ。

不細工が何やつてもモテるワケねえんだから

水を操る男の人へ、男の子達のリーダー格が詰め寄つていく。

「おい、何だよお前！ そいつは抵抗しねえから、何したつていいんだぜ？」

「そうやつてまだ性的な行為に及んでいないつてのもガキならではだけどなあ……語り口と感じで分かる、お前童貞だろ」

「どじどじ童貞ちゃうわ！」

「まあ、ならこういうのはどうだ？」

水は、一瞬でそのリーダーの全体を包む。耳だけは無事にしてあつて、男の人は口だけで笑いながら男の子へ、そして他の子へ威圧をかけた。

「抵抗しねえ、出来てねえなあ？ ならよ、何したつていいんだよな？ そりやあ楽しそうだ、混ぜてくれよ」

男の子の腕に、一撃。顔に、一撃。殴る、蹴る。単純に威力のありそうな攻撃を、急所以外に当てていく男の人。

何故だか分からなけれど、私は男の人の袖を引っ張つていた。と、その男の人は、急に笑みを浮かべた。

「おや、止めるのかい？ 君はこいつら全員に恨みがあるんだろう？ 足をかけられて、水をこぼされて。あの反応からして、今日が初めてじゃあない。君が止める義理がどこにある？」

苦しそうに暴れる男の子を見て、私は急いで首を横に振つた。もう、止めてほしい。

すると、男の人は急に水を解いた。そして、そのまま水を球に変えて、少年達を残らず打ち倒す。

「……君も、気に入らないな。どうして殺してやるうと思わない？ どうして、痛めつけてやるうと思わないんだ？ ほーほーご立派

ー

聞かれても、答える術なんて

「へえ、言葉には言葉で返さないとつてか

つー？」

「どうして分かるの、ってか？ それはな……」「

と、駆け寄つてくるさつきの男の子達。

私なんか眼中になく、その男の人に、何故かキラキラした目を向けていた。

「ゆ、勇者キルシユ様……！？ なあ、あんた勇者キルシユだろ！？」

「えつ！？」

「……はあ。分かつてんなら、話が早え。この子はな、俺が田をつけた女の子だ。到らん事してみろよ？」

「い、いえ！ 滅相もないです！ あの、『火炎の聖拳』に会えるな

」

「止めるツ！！」

鋭い怒声が響く。

男の人は、壮絶な顔をしていた。怒り、悔しさ、悲しみ。負の感情がぐちゃぐちゃに交わり、怒りだけが出てしまつたかのような、雨模様のように強い感情。

それらを一瞬で消して、男の人は笑つて見せた。

「……今の俺は、女の子大好き！ 『恋の魔術師』キルシユ様だぜ？」

「うわ、だつせえ」

「うつせ！ 溺れさすぞテメエら！」

蜘蛛の子を散らすかのように、男の子達が走り去つていいく。みんな、笑顔で。

『火炎の聖拳』、勇者キルシユ。

かつて、強大な力を持つた魔族を、命ながら、炎の拳でねじ伏せて、殺したとされる。

当時はまだ、十にも満たぬ年。それで、魔王系の魔族を倒してしまつたのだ。勇者として、彼は誇らしくしているかと思ったのに。こちらに向けて、何か変な笑みを浮かべている人からは、そんなのを感じさせなくて。

「やあ！ 改めて相談なんだけどさ、俺のハーレムに入らないか？」
なんて事を言い出したのだから、私のイメージなんて木つ端微塵
に吹っ飛んでしまった。

「……ふむ、君がキルシユか。すまんな、嫁は買い物に出ている」「はいはい！ 今をときめく魔術師、水もしたたり、風もなびく良い男！ キルシユです！ お宅の娘さん、俺のハーレムにください！」

「そんな挨拶で娘をやるとでも？」

「……マンネリとしてきた貴方、それを打破すべく新婚に戻ったつもりで、裸エプロンなんてどうだらう」

「エプロンはフリルタイプじゃなく、シンプルな構造の奴のほうが個人的には好みだつたりする」

.....

「お風呂にします？ とか王道展開もいいが、ここは敢えて、彼女に来てもらつて率直な反応を楽しむのが乙なものだと思う。それこそ、あのころの一人に戻つた気分で、な？ でも思いつきり楽しむには……ねえ？」

ありやりや、やつぱ娘さんの方が納得しないか。ていうか、そんなに激しく首を横に振らなくてもいいじゃん。

出されたバーへ一歩踏み出る。

甘いものしか飲んでいなかつた所為もあつてか、これまた抜群に苦い。誰だ、こんな泥水みたいな發明した奴。 しばいてやる。この最低野郎め。

「ああいや、ここに飴があるんだ。こいつが大丈夫かどうか、ちょっと調べる必要があるのさ」

「……ああいう薬か？」

「俺のテクは薬なんぞいらん」

「童貞だろ、お前」

「どどど童貞ちゃうわ！」

似たような台詞を聞いた気がするが、まあ、覚えていないのでいいか。

ともあれ、口をあけてくれる。

「……ふむ」

風のとおりが悪くなっている。だが、それだけで声が出ないなんて事はない。恐らく、精神的な要因が引き金となり、外部的な要因を悪化させているのだろう。

とりあえず、治しておくれ。

「ほい、飴ちゃん。すんげー美味しいぞ！」

疑っている少女だったが、意を決してそれを口に含んだ。と、暗い表情が一転し、笑顔を見せてくれる。うんうん、やっぱりこりの顔が美少女には似合つねえ！

「どうよ、蜂蜜とミルク、そして薬草を黄金比で調合した俺特有の飴は！」

「お前さんが作ったのか？」

「ああ。薬草とかなら、そちら辺の街医者には負けん。あやうやく、ちよいとお一人さん、目を瞑つて？」

父の方が肩こりで悩んでいるのは、あの行商人から聞きだしておいた。

「こりは、一気に治しておいや。」

「紡ぎ、撫でる。展開するは堂々たる縁。その慈悲を、そよ風に乗せて『ええ給わらん。そよぎ吹く女神の風！』

外傷は水の呪文を。内部には風の呪文を。

癒しにも、それぞれ担当がある。水の呪文は威力が強いため、致

命傷などの治療に使うのだ。水は癒しをくれる反面、過ぎれば毒になるのだ。岩の内部からじわじわと浸透し、いつか岩を碎くよう。何にせよ、軽い内部の傷には、風が一番。

優しい風は少女の喉へ、少女の親へと吹いて、やがて収まつていった。

「……凄いな」

軽く肩を回し、男が感慨深そうに咳いた。少女も、風邪氣味だつたのか、とても驚いた表情でこちらを見つめてくる。

「本当にお前さん、あのキルシユなのか？ 使つてゐる魔術に炎が混じつてねえぞ」

「……あんたは、どうあつて欲しい？ 英雄の俺か？ それとも、遊び人の俺か？」

「さあな。どつちもしらねえから、どうでもいいんじやないか？」

「じゃあ今は遊び人だ。いや、ハーレム作るために動いてんだから、結構……仕事してゐる？」

「それは趣味だ」

「否、生き甲斐だ！」

「もうちょいマシな生き甲斐見つけやがれ。……ちょっと、こつちに」

父親に呼び出され、家の外でキルシユは壁にもたれ掛かる。

「んで、何だよ。まさか……お前、俺を掘る気じやー？」

「その腐つた脳みそを捨ててから話をしよう」

「冗談だよ。聞きたいのは、あなたの娘の病状だろ？」

「……聰いな」

誰だつてわかる。傍目にも浮ついて怪しい俺を家に招き入れる時点で、父親として不適格だらう。知らない人を上げちゃいけません。父親は後頭部を描きつつ、言葉を続けた。

「あの子 シュニーは、どうなんだ？」

「外傷は治した。あれで喋れないなんて事は、絶対にないね。元の状態でさえ、既に話せる状況にあるんだぞ？」

「なら、どうして……」

「精神だよ。これは東洋医学の問題だが、氣を強く持てば自然と抵抗力が上がるという話がある」

「眉唾だな」

「だが、これが実に当たっている。實際、生きようとしている人間は、強い。輝きが違う。まあそれは死に触れた人間だけの特権だがね。死なないと思うことによって、死なない体が出来てくるのさ」

「どういう意味だ？」

「あの娘さん、喋ろうと意識してないって事さ」

喋れない体ではない。ただ、精神的に脆いだけだ。

「虐めに遭つてることは気づいてるな？」

「当たり前だ」

「まあ虐められる原因なんて、人とちょっと違えばいいだけさ。みんな、叩く敵が欲しいんだよ。勇者でもそうだ、何かを討伐するときには敵を立て上げてやつた方が、馬鹿どもがアホみたいに働いてくれるよ」

「……で？」

「喋りたい、言い返したい。そう思えば思つほど、自分は喋れないんだって自覚せにやならん。ま、最悪なループだわな」

シューニーといったか。あの少女も不憫なものだ。

赤の他人の、その人物達にとつてはとりとめもない会話が、彼女を追い詰めているのだから。

他人の笑い声が、自分を笑っているように感じる。この手の不安は酷く根付き、そのうち、対人恐怖症に発展するだろ。

「どうすればいい……？」

「簡単だ、二つある。世界を変えちまえばいい

至極簡単に、そう言つてみせる。あれ、何でぽかんとしてんのオツサン。

「……こんなときに十四歳病か？」

「アホか！」

真面目な話しだつ一つ。

「……彼女にとつての世界は、この冷たい世界だ。誰もが喋る自分を疎んでいると思い込んでる、そんな世界。なら、連れ出しちまえばいい」

「まさか、ハーレムつて……のは……」

何か核心に迫つたような表情だが、そんな立派な理由じゃない。いや、息子が立派になる理由だ。

「ああ、違う違う。それは俺が性的なうふんあはんをしたいが為に作つてるもんだ」

「……もう一つは?」

「いつそ、殺しちまつたらどうだ?」

寒々しいまでのシンプルな意見。

その意見に当然激昂し、胸元をつかみあげて、眉根を寄せたそのむさい表情を寄せてくる父親。

「テメエ……！ ほざくのも大概にしやがれよ……！」

「近えよ、ホモくせえな」

野太い腕を軽く払い、咳払いをして続けてみせる。

「人間、死ぬ気になれば何でも出来るんだよ。大抵はな。死に物狂いのポテンシャルを舐めちやいけねえ。……な?」

「だが……」

「可哀想とか、笑える[冗談ぬかせよ？ それは優しさじゃなく甘いだけだ。娘の為を思うなら、敢えて憎まれ役にもなつてみせる。それが親つてもんだ」

「……童貞のくせに」

「どじどじ童貞ちゃうわ！」

間抜けな会話が談笑へと変化していく。

その最中、一人ともが気づいていなかつた。

後ずさり、泣きながら走り去る彼女のことを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7655y/>

スケベ勇者の桃色珍道中～目指せ、ハーレムの旅～

2011年12月21日18時46分発行